世界を取り戻す５人の契約者

雪龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を取り戻す５人の契約者

【Ｎコード】
Ｎ０６３６Ｓ

【作者名】
雪龍

【あらすじ】
この世は不自由だ。
街の外に出れば、魔物や巨人などが徘徊している。
だが彼らは立ち向かう。
人々の自由を得るために…。

実は作者は今年受験生なので、更新ができなくなる時期があると思いますが、必ず帰ってくるので応援よろしくお願いします。

プロローグ

世界は不公平で、不平等で、不自由だ。
裕福な人間がいれば、今にも餓死しそうな人たちもいる。
天才と呼ばれる者がいれば、努力しても辿り着けない者もいる。
故に、不満が生まれ、拒絶し、最後には争いが始まる。
そして、その争いの犠牲が憎しみを生み、より大きな争いとなる。
その負の連鎖（スパイラル）が今の世に至っている。
この世を元に戻すために、６人の長達は立ち上がり、契約者を探した。

いつかこの世に自由は来る日を夢に見て――――――

「――――だってよ！お前はどう思うロット？」
「…さあ？」

外は雨が降っている。
紫色の髪の少年は頬杖をついて、外を見ている。
ここはとある図書館。
そこに少年――――ロット・アズルは友達と来ていた。
友達は一冊の本を持ってきて、ロットに読み聞かせ尋ねた。
正直ロットにとってはどうでもよかった。
何故なら自分はあまり不自由だと思っていないからだ。

だが、一般的な意見は違った。
だから、彼は自分の思いを口には出さなかった。
そして彼には、秘密があった。
ヒーローに変身して悪者を倒したり、悪の秘密結社を追っているわけでもない。
ただ、彼は契約者だった。
ただ、それだけ。
それだけと言っても良いのか、悪いのか、それは誰にもわからない。
何せロット自身にも分かっていない、否、分かろうとするつもりもないから。
ちなみに彼は契約者である事を、皆には黙っている。
誰かに言ってしまうと、勇者様とか、英雄だ、とかで騒がれて何かと面倒臭いから。
彼が契約者になったのは、2か月ほど前。
突然目の前に、得体の知れない化け物が現れたので、かなり驚いた。
彼は、半強制的に契約者となってしまった。
彼には世界をどうこうするつもりはない。
今までも、これからも。
ずっとそう…だと思っていた。
この時の彼にはまだ分からなかった。
というより分かるはずがなかった。
運命の歯車が少しずつ動き始めているなんて。

プロローグ（後書き）

（雪）「とうとうやってしまった…」
（ロット）「僕はやっと出れて嬉しいけど」
（雪）「こっちは後で別の方々に半殺しにされるんだよ…」
（ロ）「ふーん。そう言えば僕の名前って…」
（雪）「ロットはドイツ語で赤、アズルはスペイン語で青って意味だよ」
（ロ）「同じ言語で統一しなかったんだね」
（雪）「まぁね。これから出るキャラもそんなのが多いです」
（ロ）「次回からは台詞が増えるんで少し面白くなると思います」
（雪）「こっちの後書きは苦労しなさそう…」
（ロ）「と言う事で次回をお楽しみください」

第1話　出逢いはある日突然に　でも別れも突然来るものだ（前書き）

長達の台詞は『』で表されます。

第1話　出逢いはある日突然に　でも別れも突然来るものだ

「あ～疲れた～」

ロットは今人通りの少ない道を通って、家に帰っている。

「何か楽しい事ないかなー」

『なら、世界を――――』

「却下」

傍から見れば、独り言にしか見えないが、実はちゃんと会話をしている。

話し相手は、水の長・水長（すいちょう）のアクア。

水を操る事ができ、水の温度を変えて、氷にしたり、水蒸気にも出来る。

ちなみに全長３ｍほどの青い鳥の形をしている。

「もっとこうさぁ…あれだよ…楽しい事って言うのは…」

『ならば、やはり世界を――――』

「だから違うっ！」

先程とは違う話し相手は、炎の長・炎長（えんちょう）のブラド。

炎を操る事が出来る、２ｍほどの炎の大男だ。

園長ではないのでご注意を。

本来、契約は一人につき、一体なのだが、ロットだけは二体できた。

契約すると、目と髪の色が変わる。

ロットの場合炎＝赤、水＝青という作者の勝手なイメージで、紫になっている。

「駄目だ。こいつらと話しても埒があかない」

ロットはふと上を見上げる。
すると天から何かが落ちてくる。
最初見た時、どうせ鳥だろう、と思った。
だが、近づいてくるにつれ、形が鳥ではない事に気付く。
しかも何か言葉を発している。
あと、数十メートルと言う所で、やっと正体が分かった。

「人っ！！？？」
「どいてーーー！！！！！！」

その叫びはむなしく、思い切りロットの上に落ちてきた。

「いたた…あれ？怪我がない」
「そりゃそうでしょ。人の上に落ちたんだから」

堕ちてきた人物（よく見ると少女だった）は、ごめんごめんと言ってロットの上から下りた。

「大丈夫？怪我ない？」
「無茶言わないでよ。骨いってるかも」
「ええ！！？大変すぐ病院に――――」
「その必要はないよ」

ロットは普通に立ち上がると、じゃあと言って歩き出す。

「ちょっ、じゃあ、じゃないでしょっ！」
「傷に響くから、大声出さないでくれない？」

少女は手を両手で覆い、普通のトーンで喋り出す。

「早く病院に行かないと…」
「大丈夫だって。骨いった（かもしれない）だけだし」
「ああそうね、骨いっただけか…って違うでしょ！！」

少女は、自分が大声を出したのに気付いて、また口を覆う。

「骨いって病院行かないでいつ行くの」
「病院なんて行った事ないけど」
「えっ！！」

少女はまた口を覆う。
それを見て、ロットは歩き出――――

「ちょっと待って。聞きたい事があるんだけど」
「いきなり落ちてきて、騒いだかと思えば、今度は質問？君常識ってもの知ってる？」
「そうね…ごめん。あたしはサリ・ジール。それで聞くんだけど…」
「あ、質問はするんだ」

ロットは苦笑する。
この人とまともに話してても、無意味だと直感したから。

「この街に契約者がいるらしいんだけど知らない？」

ロットはそれを聞いて、内心驚くが顔には出さない。
正体が分からない以上、あまりぺらぺらと喋るのはやめた方が良いだろう。

「さぁ？知らないけど」
「本当に？」
「本当に」

ロットはオウム返しする。

「じゃあ、僕は帰るんで」

そう言ってロットは、サリを置いて帰ろうとした。
だが

「しらばっくれないでよ。ロット・アズル君」
「！！　…何で僕の名前を？」
「それはあなたを探してたからよ」

頬に嫌な汗が伝う。

「君何者？」
「あたしは、あなたと同じ契約者。雷の長・雷長（らいちょう）のグロムのね」
「…その契約者さんが何の用？」

ロットがポーカーフェイスで尋ねるが、それはバカのせいで、意味を失くす。

『おおグロムか！！久しいのう』
『探したぞ、ブラド！！』
「え、ちょっ」
『私も忘れるなよ』
『なっ、アクア！？』
「えっ！二体も！？」

それはサリもグロムも知らなかったようで、かなり驚いている。

『何故二体も…』

「ここじゃ面倒だからうちで話さない？」

「なるほどね…そんな事がねぇ…」

まだ不思議そうにロットを見つめるサリ。
少女の黄色い目と髪が近づいてくる。
ロットは敵意が無いと思い、家に連れて来たのだが、まだ警戒は解いていない。

「で、聞き忘れてたけどご用件は？」
「えーと、単刀直入に言うと…」

「世界を取り戻すために共に立ち向かいましょう！！」
「やだ」
「即答な上に却下！？」
『何故じゃ。何故契約したのにも関わらず、世界を取り戻そうと…』
『それは私達に責任がある』
『どういう事じゃ？』

グロムが顎髭を撫でながら、尋ねる。
ちなみにグロムは普通の顎髭が長いおじいさんのような姿をしている。

『あれは二カ月ほど前…』

ワシとアクアは一緒に行動していた。
だが、腹が減ってワシらは力尽きてしもうたんじゃ。

『力尽きたのはお前だけだろう！』

…とりあえずワシらは困り果てておった。
そんな所に救いの女神様が現れたんじゃ。

「僕は男なんだけど。ていうか君達がうちに来たんだよね」

……少年は、ワシらに少し驚いておったが、食料をくれた。
そして何か恩返しをしないといけない。
そう思ったらあれしかないと思い、契約してもらったんじゃ。
じゃが、そこで問題が起きた。
契約は、ワシらのどちらかしか出来んのじゃ。
ワシらは、じゃんけんで決めようと思った。じゃが

『私はパーしか出せないだろう』

そんな事は全く考えてなかったワシは、少し助かったと感じた。
何故ならワシはグーを出そうとしていたから。

「それは君が頭悪いだけで……」
『うっさいわい！！さっきから横でいらんことばかり…！！』
「君が変な事ばかり言うからでしょ。真面目にして。真面目に」
『とりあえず、黙っとれ…』

結局ワシらの勝負はつかんかった。

『というより何もしていないんだがな』
『黙っとれ言うとるだろーが！！！』

そこでロットがとある提案をした。
「二人とも契約すれば良いじゃないか」とな。

「『うっわー。似てなー』」
「後で覚えとれよ…！！」

その手があったか。
そして、ワシらは制約を伝えるのを忘れたまま、契約したんじゃ。

『…アクアがついていながら何をしておるんじゃ』
『それはどういう意味じゃ！』
『すまない…』

『お前も何故謝る！』
『二体も契約してこの子の精神が崩壊したらどうするつもりじゃったんじゃ！！』
「別に良いでしょ。崩壊なんてしてないんだから。結果オーライだって」

ロットの言葉に、グロムは溜め息をつく。
その時サリが立ち上がり言った。

「あなた、本当に行かないの？」
「行かないけど」
「悔しくないの？」
「何が？」
「魔物や巨人に支配されて…こんな不自由な生活悔しくないの？」
「別に」
「えっ？」
「だって、不自由だとは思ってないし。それに…」
「もう良い。これ以上話しても無駄だわ。さようなら」

そう言うと、サリは出て行ってしまった。

「……騒がしい子だったね」
『…正直今のは私も失望したぞ。あの言い方は無いだろう』
「じゃあ出てけよ…！」

ロットの声が震えている事に気付く。

「何も知らないくせに偉そうな事言ってんな！！」
『ロット？』
「うっせえ！！さっさと出て行って、他の奴の所に行きゃ良いだろ

うが！！」
『…では、そうさせてもらおう。世話になったな』
『ブラド…！！』

ブラドはサリが出て行ったドアから出ていく。
たちまち、ロットの目と髪が青くなっていく。

「お前も――――」
『私は行かない。それにブラド(あいつ)もいずれ帰ってくるだろう。さっきの子を連れてな』
「は？何を言って――――――」
『私達はお前の精神(なか)に住んでいるからな。お前の記憶を少し見たんだ』
「！！！　お前…！」
『まさか…あんな事があっただなんてな』

あれは七年前の事。

第1話　出逢いはある日突然に　でも別れも突然来るものだ（後書き）

（雪）「やっと今日で長かった塾の春期講習も終わるよ～」
（ロ）「それは良かったね」
（雪）「まぁね」
（ロ）「・・・・・・」
（雪）「どしたの？」
（ロ）「次回予告しないの？」
（雪）「ああ、次回はロットの過去が明らかに！そしてサリとはどうなるのか！」
（ロ）「では、次回もお楽しみに」
（雪）「…それ言うために待ってたの？」
（ロ）「そうだけど？」

第2話　ロットの決意

あれは七年前の事。
ロット・アズルがまだ黒い髪だった9歳の頃。
父、母、兄の四人家族だった。
彼の家は、決して裕福とは言えないものの、毎日が幸せで楽しかった。

ある日、兄が変な事を言い出した。
「人は闇に堕ちたらどうなるか知ってるか？俺みたいになるんだよ！」
その日から兄は不可解な言動をとるようになった。
そして事件は起きた。

兄が、友人を殺したのだ。
理由は、人間が死んだらどうなるのか知りたかったから、というマンガで何かに取り憑かれた人が言いそうなものだった。
それから、家族全員は街の人達に虐げられるようになった。
兄はどこかへ行ったまま、帰ってこなくなり、親は自殺した。
ロットはその日からずっと一人ぼっちになってしまった。

商店街に行くと、大人から気持ち悪い、などの罵声を浴びせられたり、暴力を振られたりもした。
子供からは石を投げられる始末。

「もう嫌だ！僕は何もしてないのに！何で僕ばっかりこんな目に会わなくちゃいけないんだ！！」

そして、彼は決意した。

「此処にいたら僕まで死んでしまう。絶対に生き延びて、こいつらを見返してやる…！！」

彼はその日のうちに、家を出た。

その頃はまだ、魔物や巨人がいなかったので、襲われる心配が無かったのだ。

彼は歩いているとき何度も、人間なんて…と考えた。

自分も人間であるにもかかわらず、彼は街の人々を憎んだ。

そして今いるこの街についた。

この街の人は優しかった。

いや、本来なら故郷の街の人も優しかった。

見ず知らずのロットに対し、街の人は食料や住む場所まで与えてくれた。

更に学校にも入った。

いつしか彼の心の中の憎しみは、楽しくありたいという考えに変わっていった。

けれど、彼は夜になると、昔の事を思い出すらしく、かなり精神が不安定だ。

だからブラドとアクアが必要なんだ。

「…それって本当？ブラド」
『ああ』
「あたし…彼の事何も知らずにあんな事言って…」

サリは立ち上がる。
それをブラドとグロムが見ている。

「あたし、謝ってくる！そして、もう一度説得してみる！」
『うむ、我が主人（マスター）がそう言うなら仕方ないの』
「ありがとう、グロム」

サリは笑顔でお礼を言い、走ってロットの元へと向かった。

「…ホントに帰って来たな」

ロットは息を切らしているサリを見て、苦笑する。
先程の事はあまり気にしていないらしい。

「さっきはごめん…ブラドから聞いたよ」
「…で？それを言いに戻って来たの？」

サリはその場に正座し――――

「あたしと一緒に世界を取り戻すための旅に出てください」
「・・・・・・・」

今度は即否定はされなかった。
てっきりすぐに、断られると思っていたサリは、少し驚く。

「…全部知って尚誘うの？」
「ええ、あなたの力が必要なの。お願いします」
サリは深々と頭を下げる。
それを見て、ロットは笑みを浮かべる。

「しょうがないなぁ。君、面白そうだし」
「じゃあ…」
「行くよ。僕も」
「ホントにっ！？」
「でも、出発は明日でも良い？」
「そっか。準備とかあるしね」
「いや、まだ傷が痛いだけ」

それを聞いて思わずずっこける。
ロットはそれを無視し、玄関の方を向く。

「ブラド、君はどうする？他の契約者探す？」
『…ロット・アズル殿』
「はい」
『もう一度、私の契約者となってください』
「…分かった。じゃあ明日に備えてもう寝ようかな」

ロットは欠伸をしながらベッドに向かう。

「ちょっと待って！」

ロットは眠そうに目を擦りながら振り向く。

「あのー…あたし寝るとこ無いんだけど」

「要するにここに泊めろって事？」

サリは黙ってうなずく。
しかしロットの家には、一つしかベッドは無いのだ。
ロットは何か思いついて、ベッドに近寄り、布団をめくる。

「…えーと、入れってこと？」
「うん。何かいけない事でもある？」
「当り前でしょ！！何考えてるの！？」
「え？ベットじゃやなの？贅沢だなぁ」
「そーゆー問題じゃなくて、何で一緒に寝ないといけないのよ！あたしは女よ！！」
「誰が一緒に寝るの？」
「…はい？」

サリはロットの言っている意味が、いまいち理解できていない。

「別に床で良いなら、僕がベッドで寝るけど？」

ようやく意味が分かった。
つまり、自分は床で寝るから君はベッドで寝なよ、という事らしい。

「ああ…そう言う事か」
「襲ってほしいなら、一緒に寝てあげるけど？」
「遠慮しときますっ！！！」

サリはベッドに入る。
中々優しい奴じゃない。
そんな事を思う夜になったとか。

「よしっ！準備はいい？」
「うん…良いよ」

「滅茶苦茶眠そうね」

サリは一応軽くツッコミを入れる。
昨日の夜ロットはどこかに行っていた。
まあ、すぐに帰ってきていたが。

「とにかく行くわよ！！」
「まずどこに向かうの？」
「そうね…まずはお父さんに会わないと…」
「サリってファザコンなの？」
「ち、違うわよっ！！お父さんも一緒にワープしたんだけど、なぜか違う所に飛ばされちゃったの。だから一応捜さないと…ね？」

ロットは少し驚いたが、やがて冷めた目でサリを見る。

「な、何よ…」
「…別に隠さなくて良いと思うよ」
「えっ…？」
「お父さんが好きなことは恥ずかしい事では…」
「だからちがーーーーーーーーう！！！！！」

サリの右ストレートがロットの顔面をえぐる。
ロットは鼻を押さえてうずくまる。

「行くわよっ！！」
「気の強いどころか、力もとはね…」
「何か言った！？」
「別に」

こうしてロットとサリの世界を取り戻す旅が始まるのだった。

第2話　ロットの決意（後書き）

（雪）「やっと旅に出たね」
（ロ）「一日に三つもよくやったよね」
（雪）「どーも」
（ロ）「この調子でどんどん頑張ってほしいものだけど」
（雪）「そうはいかないのが人生ってものだよ」
（ロ）「そう言う事だよね」
（サリ）「何であんたらそんなに悟ってんの？」
（ロ）「あっ、サリ。これからよろしく」
（サ）「う、うん…」（昨日ドキドキしてあんまり寝れなかった…）
（雪）「男の子の家に泊まるなんて初めてだったんでしょ」
（サ）「あたしの心を読むな！！」
（雪）「いや、一応作者だからね？僕」
（ロ）「次回からはどんな展開になのか。次回をお楽しみに」
（雪）「ロットはちゃんとしてくれるから大助かりだわ」

第3話　初っ端からの敵襲

「さて、これからどうするの？」

今、二人は街を少し出た辺りにいる。

「そう言うと思って…これよ！！」

「何それ？」

サリが背負っている鞄から出したのは、目盛りとボタンが付いているだけの機械だった。

「これは『ぶっ飛びワープDX22号』よ！！」

「大体分ったけどどういう物なの？」

「この機械は契約者の元へひとっ飛びできる機械なの。ただ…」

サリは機械を見つめながら続ける。

「契約者の元へ行く前に別の場所に飛んで困っている人を助けないといけないの」

「何その変な設定？」

「世界を取り戻すための前段階って感じかな」

サリは何故かボタンを押してしまった。

「あれ？やっちゃった…」

「ちょっ、何してんの！！」

二人は光に包まれる。

その光が消えた時、二人の姿はそこに無かった。

「ん…ここは…」

ロットは体を起こそうとした。
だが、体の上に何かが乗っていて起きれなかった。
それは金髪の少女、サリだった。
ロットはサリを体の上からどかし、横に寝かせた。
その時サリがちょうど起きた。
サリは自分の肩に乗っているロットの手を見て、顔を真っ赤にし――

「ロットの…」
「？」
「変態ーーー！！！！！！」

思い切り殴り飛ばした。
ロットは2，3mほど吹っ飛んだ。

「あたしに何しようとしてたの！？」
「な、何も…上に乗ってたから、どかしただけ…」
「え？あっ、そなの…？ごめん…」
「大丈夫。それよりここは…」

ロットは周りを見渡す。
二人が今いるのは、どこかの村の中だった。
しかし――――

「誰も…いない」

外に誰も歩いていないどころか、気配すら感じない。
だが、ロットは一点をじっと見て言い放った。

「出てこい。いるのは分かってる」

そう言うと、壁だったはずの場所が歪みだし、それが人の形となった。

そして、最終的に何処にでもいるようなお爺さんになった。

「ほっほっほっ、わしの擬態を見破るとは…何者ですかな？」

「大体は分かってるんじゃないの？」

「ほっほっ、流石契約者様達」

「何故あたし達が契約者だと？」

「言っちゃ悪いけど、こんな錆びれた村に商売や観光目的で来る奴はそういない。そしてその辺りを見るからに、何かに襲われた痕跡がある。恐らくそれを退治してほしいとかそんな事思ってたんでしょ？」

お爺さんはこくりと頷いた。

「まぁ、立ち話もなんですから家に来てください」

二人はお爺さんについて行き、家に上がらせてもらった。

お爺さんは、お茶を持ってやってきて、二人の向かいに座った。

「わしはこの村で村長をしております」

「それより、何に襲われたらこんなに？」

「最近魔物による被害が増えておりましてな…」

「それだけ聞ければ十分。それでは」

ロットはそう言って、出ていく。

サリも一礼してからロットの後をついて行く。

「ちょっとロット！まだ話の途中…」
「あの爺さん、本物の村長じゃねぇ」
「えっ…？」

サリは告げられた事についても驚いたが、それよりもいつもとロットの口調が違う事の方が驚いた。

「どういう事？」
「第一、俺達を一目見て契約者だと分かる奴なんていねぇ」
「でもさっきあんたが…」
「あれはでまかせだよ。他にもいろいろある。この村には村長以外の気配が全然ない。幾ら魔物に襲われたからって、村長だけ残してこんなに暴れ回るか？それに血の臭いや死臭がしない」
「でも、魔物が連れ去ったのかも…」
「最後に、この辺りには魔物はいない。その証拠にここには…ほら」

ロットが拾ったのは、果物の皮だった。

「魔物は肉しか食わない。というより、歓迎ムードならお茶に睡眠薬なんて仕込まねぇよ」

そう言ってロットは振り返る。

「なぁ？爺さん、そうだろ？」

お爺さんは物陰から笑いながら出てきた。

「確かに、我らは貴様らを拘束、もしくは暗殺に来た」

「我らって事は、一人じゃないんだろ？出てこいよ」
お爺さんは、左手を上げ合図をする。
すると、ロットとサリを囲むように黒装束の顔を鼻の辺りまで覆っている集団が、十数人現れた。
「誰の手駒だ？」
「教えるはずが無かろうに。ただこれだけは教えておいてやろう。我らはエリート暗殺集団『亜娑神（アサシン）』だ！！」
二人はそれを聞いて驚いた。
「『亜娑神（アサシン）』！？」
「…ネーミングセンスが…」
もうちょっと考えられなかったの？や、ひどすぎると言う感想を持ちはしたが、そこまでは言わなかった。
だが全て言わなくても、意味はおおよそ通じたようだった。
「貴様ら…我らを愚弄する気か！！」
「いや、あまりにもネーミングセンスがね…」
「そういや、さっき自分たちで、エリートって言ってたよな」
「貴様らぁ、舐めた態度をとるのも大概にしとかないと痛い目を見るぞ！！」
「あんた達に怪我をさせないようにって、考えはないんだろ？」
「もう良い。貴様らかかれ！！」
暗殺者たちは一斉に二人に襲いかかる。
「ったく、今時忍者なんて流行らないっての」

「後ろは任せたわよ！雷長の力解放！！」
『うむ、出番が来たのは良いがもうすぐ終わりそうじゃな』
「じゃあ、俺も行くか…」

「炎長の力、水長の力それぞれ半解放！！」

第3話　初っ端からの敵襲（後書き）

（サ）「さて、今回はあたしの名前の由来を発表するよ」
（雪）「サリはアゼルバイジャン語、ジールはオランダ語でそれぞれ黄色と言う意味です」
（サ）「ついでにグロム達のも」
（雪）「ブラドはスウェーデン語での炎をもじった奴、アクアは色々な国での水と言う意味、グロムはロシア語で雷という意味です」
（サ）「次回は英語表記を頑張ってみよっか」
（雪）「頑張るのは僕なんだけど…」

第４話　ロットの力！両極解放！

「さぁて、来いよ。お前らなんて俺だけで十分だ」
「貴様一人で何ができる！！」
「あたしは！？」

ロットの挑発に簡単に乗るお爺さんにツッコむサリ。
一人の暗殺者が何も言わずに、ロットに向かって行く。
しかし、ロットは右手から炎を出し向かって来た敵を倒す。

「全員で来いよ。じゃねぇと相手になんねぇ」
「では、お望み通り」

暗殺者達が一斉にロットに向かう。
サリの方には誰も来ないので、ただつっ立っている。

『折角わしの力を解放したのにのぅ…』
「うん…そだね…」

その時ロットは次々と敵を倒していた。
右手に炎、左手に水を出している。
暗殺者の一人が手裏剣を投げてきたら、炎で溶かし炎の弾を投げる。

「ほう…私の部下がここまでやられるとはな」
「ここまでって言うか全員よね…」
『そうじゃな…』

サリとグロムは邪魔にならない所で、棒立ちしている。
だが、いつの間にかサリの後ろにいた敵の一人が、サリを羽交い絞

めにする。

「サリ！！」
「良くやった。これで形勢逆転だな」
「くっそ～。ゴメン、油断した」

最後に舌を出し、テヘッとかわい子ぶる。
その瞬間空気が凍りついたが、ロットが咳ばらいをした。
サリはかなりげんなりする。

「困ったなぁ」
「言っとくけどあたしに触れると痺れるわよ」

サリが言ったのは比喩ではなく、体から電気を出して部下を気絶させる。

「レディに触れるにはそれなりの覚悟が必要なのよ！」
「お～、お見事」

ロットは拍手する。

「ふむ…そろそろこの姿も飽きたな。元に戻るか」

そう言って、お爺さんは煙玉を地面に投げつける。
その瞬間、当然のことながら煙で姿が見えなくなる。
そして、煙の中からもの凄いスピードで手裏剣がロットに向かって3枚飛んでくる。
あまりのスピードに避ける暇もなく、手裏剣はロットの左肩、脇腹、左足にそれぞれ刺さる。

「ロット！！」
「ぐっ…！」

ロットは地面に膝をつく。
その時、ようやく煙が晴れ、中から人が現れる。
中から現れたのは、目を黒い布で覆った男性だった。

「ん～、やはり何も見えんな…」
「そりゃ目隠ししてたら何も見えないだろ」
「いや、元から見えないんだよ。正確には生まれた時から…な」
「ふ～ん、興味ないわ」
「そうか。ロット君」

ロットは自分の名前を言われて、少し驚いた。

「標的（ターゲット）の名前くらい知ってて当然か。あんたの名前は？」
「私は暗殺者だ。名乗るとでも？」
「そうかい」
「冗談だよ。私のコードネームは『ローザンメイル』」
「やっぱ本名は明かさないか…。呼びにくいからローザンって呼んでいい？」
「ローザン…好きにすればいい」

ローザンメイル、もといローザンはクナイを逆手に持ち、構える。
ロットも手裏剣を引き抜く。
それをローザンに向かって投げる。
だが、それをクナイで弾き、ロットに向かって行き、クナイで斬りつける。
それを躱し、炎を纏った右手で殴る。
更にそれを躱す。という攻防が何度か続いた。

「埒が明かない。ちょっと嫌だけどあれしかないか…」

そう言うと、ロットは目を閉じて言った。

「炎長の力、水長の力両極開放！！」

その瞬間、ロットの体が光に包まれた。

「！」

崖の上に立っている男は何かを感じた。

「この力はもしや…」

だが、すぐに首を振る。

「そんな訳ないだろう…だが、一応見に行ってみるか」

そう言うと、男は崖から姿を消した。

――――――ほぼ同じ頃

こちらでも森の中で、何かを感じ取った男がいた。
手には方位磁石を持っている。

「なんてこった…これは大変だぞ…」

男は頭を抱えている。

「この方位磁石壊れてるーーー！！！！！」

男は森の中で一人叫んでいた。
運よく誰かが通りかかる事を願って。
方位磁石の針は先程からぐるぐると回っている。

「まだあの子にも会ってないのにこんな事って有りかよ！！ちくしょう！！」

男が叫んでいると、草むらが揺れた。

男は目に希望の光を溢れさせた。
しかし、現れたのはなんと狼の様な魔物だった。
「…良い所に来たな。丁度腹が減っていたんだ」
男は駆けている眼鏡を押し上げる。
次の瞬間鮮血が舞い散った。
「悪く思うなよ。この世は弱肉強食だからな」
そう言うと、男は魔物に触れようとする。
だが、もうすぐ触れるという所で手を止めた。
そして、踵を返し歩き出す。
「魔物なんて食ったらどうなるか分かったもんじゃない。ヤベッ、想像しただけで…キモチワル…」
ここから先はお見せできません。
「オヴ――――――…」
声もお聞かせできません。

光がやんだ時、ロットの右手には赤い水、左手には青い炎を纏っていた。

「・・・・・・」

?行きます…?

ロットの声が女性の様なそれに変わる。

そして右目が赤、左目が青色となっている。

「この肌に感じる力…これはまずいな」

ロットは両手を頭の上で指を組む。

すると、二つが合わさり、紫色の光となる。

「何…あれ…」

『わしにも分からん…あれが二体の長と契約した者の力か』

ロットは紫色の光をローザンに向けて発射する。

それがローザンの肩を掠る。
すると、光を浴びた場所が紫色に凍る。
「なっ…！！」
ロットは更に光を発射する。
今度は、足に掠り、掠った場所が紫色に燃え始める。
「くっ…何なんだ！！」
？これで終わりです？
右手を上に向ける。
すると、紫色の光が右手に集まる。
それをローザンにむけて投げる。
そして、ローザンに被弾し、紫色に爆発した。
「すごい…」
「…うっ…」
「ロット！！」
サリはロットの元に駆け寄り支える。
「大丈夫！？」
「大丈夫に…見える？」
サリは横に首を振る。
それを見て、ロットは微笑む。
「――――良い雰囲気の所を悪いがもう終わりだと思っているのか？」

「「！！！」」

そこには男が立っており、後ろにはローザンが立っていた。

第４話　ロットの力！両極解放！（後書き）

（ロ）「なんかこの話長くない？」
（雪）「そうだね…いつ全員揃うんだろ」
（ロ）「やっぱあの機械の設定はいらなかったんじゃ…」
（雪）「いや、そんな事はない！」
（ロ）「あっそ…」
（雪）「ロットの口調って回を追う毎に変わっていくよね」
（ロ）「でも、基本は１話、２話の感じなんでしょ？」
（雪）「そうだね」
（ロ）「…ネタが尽きたね」
（雪）「…そうだね」
（サ）「ネタってあんたら…」

第5話　お父さん現る！？

「なっ…！」
「…久し振りだな」

男はロットの方を見ていう。
男は仮面をしており、顔は分からないが全体的に黒を基調とした格好をしている。

「僕は知らないけど…サリ？」
「あたしも知らないよ？」
「という事だから人違いじゃない？」

男はクツリと笑う。

「この状況でもその余裕…本当に変ってないな」
「あれ？もしかして僕に言ってる？困ったなぁ。君の事なんか覚えてねーや」
「ふっ、そこまで警戒しなくても良い。今回はこいつを連れ戻しに来ただけだ」

そう言って男はローザンを親指で指差す。

「なら早く帰ってくんない？こっちも疲れたんだけど」
「…その前に一つしないといけない事がある」

そう言った瞬間、ロットとサリは身構える。

「君達には何もしない…ただね」

「ただ…何よ」
「あそこにここの村人達が監禁されている」
男は少し離れた所にある屋敷を指差す。
恐らくこの村で一番大きい建物だろう。
「それとこれは起爆スイッチだ」
今度は屋敷を指差している逆の手でボタンが付いている機械を取り出す。
「これで何が言いたいのか…分かったよな？」
「まさか…！！」
ロットは男に向かって走る。
「やめろおぉぉぉ！！！！！」
ロットは男まで後少しというところまで近付く。
しかし、その瞬間男の後ろからローザンが出てきてロットを殴り飛ばす。
「ロット！！」
「それから手をどけろ！！」
「…その頼みは聞き入れられないな」
そういうと男はボタンを押した。

――――――ほぼ同時刻

ここはまたもやとある森の中

「もう嫌だーーー！！！！！」

男は叫んでいた。

手には先程とは違い、地図を持っている。

「もしかしたら…もう二度とあの子に会えないんじゃ…」

男は急にネガティブになり膝をつく。

叫んだり、ネガティブになったりと忙しい事この上ない。

「いや！まだ諦めてはいけない！！！！」

男は勢いよく立ちあがる。

その時、後ろの草むらが揺れた。

「さっきので学習したんだ！いくら魔物とはいえ殺しはしない！！！」

そう言うと、男は全速力でその場を後にした。

「…あれれ？さっき声がしたと思ったんだけどなぁ」

草むらから出て来たのは緑色の髪の青年だった。

「くそっ！ここはどこだーーー！！！！！」

この森にはもう一人迷子がいた。

男がボタンを押した。
しかし、何も起こらなかった。

「なっ！何だ！？」
「どうした？何をうろたえている？」
「誰だっ！！」
男は声がした方を振り向く。
するとそこには長い黒髪の男性が立っていた。
「誰？そうだな…私はシュワーツだ」
「なっ…！！」
シュワーツと名乗った瞬間男が驚く。
「貴様には用はない…さっさと消えろ」
「…まぁ良い。今回はただの余興だ」
そういうと男とローザンは一瞬にして姿を消した。
「あの…」
サリはシュワーツに恐る恐る話しかける。
「何だ？」
「さっきは、ありがとうございました！」
そう言い、深々と頭を下げる。
「…いや、私は償いをしているだけだ」
シュワーツはロットへ視線を向ける。

「いずれまた会う事になるだろう」
「はい？」

シュワーツは踵を返し、去っていった。

（あいつ…どっかで見た気が…）
「…ット！ロット！！」
「うわっ！何！？」
「何！？じゃなくて村の人達を捜しに行こうって」
「あっ、ああ…」

二人は屋敷へと向かった。

二人は屋敷の中に来ていた。

「…人の気配がしない」

「いや、いる。絶対」

「何でそう言い――――――」

サリはロットが指をさしている事に気付く。
その指がさしている方向を見てみると女性が倒れていた。

「大丈夫ですか！？」

サリは女性を抱き起して、声をかける。
すると、女性は瞼をゆっくりと開いた。

「あなたは…」

「あたしはサリ。こっちがロット」

「何があったの？…って言うのはもう良いや」

女性が何かを思い出し、立ちあがり周りを見渡す。

「皆は！？どこ！？」

「多分どっかで寝てるんじゃない？」

三人は村人たちを捜すことにした。

すると、次から次へと寝ている村人が見つかる。

やがて、村人は全員無事に見つかった。

「本当に宜しいのですか？」
若い村人が尋ねる。
「はい、お礼が欲しくてしているわけではないので」
「しかし…」
「だから良いんだってば」
ロットが軽い口調で言う。
「では、あたし達は行くんで」
「…心より貴方達の無事を祈っております」
「ありがとうございます」
そう言うと、二人は歩いて行った。
「そういやさ。またあの機械使うの？」
「大丈夫よ。今度はちゃんと契約者の近くに着くから」
村から少し離れた所でロットが言うと、サリは機械を取り出して言う。

「じゃあ、行くわよ」

サリはロットの返答を聞かずにボタンを押した。
二人は光に包まれる。
その光が消えた時、二人の姿はそこに無かった。
…前にもこれ言ったような気がする。

――――――とある森の中

「ここは…」
「森みたいね」

今回はちゃんと着地できた。
ロットは一先ず腰かける。
その瞬間――――――

「またか！！！」
「何回来れば気が済むんだ！！ってさっきはこいつだったけど！！」

突然後ろから叫び声の様なものが聞こえた。
振り返って草むらの隙間から見てみると、二人の人が立っていた。
一人は眼鏡をかけていて白衣を着ている男性。
もう一人は髪と目の色が緑色の青年だ。
ロットは立ち上がり草むらを除けて、二人の前に立つ。

「ちょっと一体何？」

サリも後ろをついて行く。
そして、男性と目があった瞬間思わず、あっと言った。

「どうしてここに？」
「何故こんな所にいるかって？それはあなたの様な綺麗なお嬢さんに――――ぶはっ！！！」
青年がサリに近付いて言うと、男性が青年の腹に蹴りを入れる。
そのせいで青年は吹っ飛ぶ。

「貴様…うちの娘に手ぇ出すたぁ良い根性してんじゃねぇか！！」
「…娘？」
「ちょっとお父さん！何してんのよ！！」
「お父さん…？まさか…」
「えーっと…」

サリは男性を指差す。

「この人、あたしのお父さん」
「えええぇぇぇ！！！！？？」

第5話　お父さん現る！？（後書き）

（サ）「出て来たわね…」
（雪）「親をそんな風に言わなくても…」
（ロ）「ていうか、サリのお父さんって契約者なの？」
（雪）「それは次回分かります！という事で次回もお楽しみに」
（ロ）「ちなみにシュワーツはドイツ語で黒という意味です」
（サ）「何であんたが知ってんの！？」

第6話　ゼレナ・ヴェルデとアネモス

「で、要するにあなたが…？」
「オレはサリの父親で、ムセイ・ジールだ」
白衣の男――ムセイは自分を指差して言った。
「ところでだ…てめぇ…」
ムセイはロットを睨みつける。
かなりの剣幕で睨まれているので、ロットは少しビビる。
「うちの娘に手ぇ出してねぇだろうなぁ…！！」
「…どう思う？」
「あぁん？てめぇ誰に向かって――ふがっ！！」
ムセイは後ろからサリに殴り飛ばされ、思い切り顔からスライディングした。
「ロットはそんな事してない！それにロットもちゃんと否定して！！」
「ご、ごめんよ。サリちゃんが変な男に手を出されてないかと思うと、全然寝れなくてさぁ…」
「ベッドまで貸してあげたのになぁ…」
「ベッド？…」
ムセイは腕を組んで何かを考える。
そして――

「貴様ぁぁ！！！やはりサリとあんな事やこんな事をぉぉ！！！！！」
「だから何もされてない！！！」
ムセイがロットの胸倉を掴み怒鳴る。
それをサリが殴って制す。
そこに先程の青年が手を挙げて言う。

「すいませーん。何か変な雰囲気だけど良いッスか？」
「あっ、まだいたんだ」
「いたわ！…まぁ良いや」
「で、何？」
「何か知り合いっぽいけど、あんたら何者なの？」
「僕達は旅人で、ちょっとはぐれてたんだ。僕はロット・アズル」
「あたしはサリ・ジール」
「オレはムセイ・ジール。この可愛いサリちゃんの――――」
「いらん事言わんでよろしい…！！」
「へー、旅人ねぇ…あっ、俺様はゼレナ・ヴェルデね」

ゼレナはあまり興味が無いのか、頭を掻きながら適当に聞き流す。

「そう言えばムセイは何の長の契約者なの？」
「ムセイさんと呼べ！！そしてオレは契約者じゃねぇぞ」

ロットが少し音量を下げて喋ったにもかかわらず、ムセイが大声で叫ぶものだから隠していたのがパーになった。

「えっ？てことは…」

三人は一斉にゼレナを見る。

ゼレナは視線に気付き少しおどけた顔をした。
「ん？どした？俺様は契約者だが…まさか俺を捜してたの？」
「この人が？契約者？」
「信じられない」
「胡散臭ぇな」
「ちょっ、酷くねぇか！？」

その後もいろいろと言ったが中々信じてもらえず、ゼレナは少し諦めていた。
その時草むらが揺れた。

「また魔物か！？」
「また？お父さん魔物にあったの？」
「あぁ、食おうと思ったんだが思いのほか気持ち悪くてな」
「…絶対やめてよね」

ムセイは何も返さなかった。
その代りにゼレナが「これだ！！」と叫ぶ。

「そうだよ。これだよ」
「何がどれなんだ？」
「ここで俺様が力を使えば信じてくれるだろ？」

そう言った瞬間熊の様な魔物が出て来た。
ゼレナの二倍ほどの大きさをしていて、それを見た瞬間ゼレナの体が強張る。

「あ、あれ相手にすんの？」
「そうだよ？」

「ちょっ、あれは規格外だって」
「イケるって！頑張―――」
「違う違う。そうじゃなくて…」

ロットがサリに耳打ちをする。
そして聞いていくうちに、サリの顔が赤くなっていき最終的に茹でダコのように赤かった。

「さっ、やってみて」
「え、あ…／／／／／」
「な、何？早く逃げた方が…」
「えっと…／／／／／」

サリは目を閉じ思い切り言った。

「か、勝てたら後で良い事してあげるから頑張って！！！／／／／／」
「なっ！！！良い事だと！！？」
「てめぇ！！サリちゃんになんて事言わせてんだ！！！ゴラァ！！！！」
「えっ？僕はちょっと色っぽい事言ったら簡単に落ちると思うよって言っただけだけど」
「それが駄目だってんだよ！！！！」
「あぅ…」

サリは頭から湯気を出して倒れた。
それを地面に倒れる前に抱えたのはロットだった。

「危な…お父さーん、ちゃんと気を付けとかなきゃ」
「お父さん言うな！！！」

「…る」
「ん？何か言った？ゼレナ」
「頑張る…」
魔物がゼレナに向かって拳を振りかぶる。
「風長の力解放！！！」
そう言った瞬間魔物が風に圧され吹き飛ぶ。
『ムミュ～、良く寝た～』
そう言って現れたのは、緑色のタヌキの様な生き物だった。
『おぉ、アネモスではないか！』
『ん？わぁ、久し振り～。元気だったぁ？』
「ちょっとアネモス。感動の再会はもうちょっと待ってもらっていいか？」
『分かったぁ。じゃ、また後でねぇ』
アネモスはゼレナの体に戻っていく。
「さぁ、行くぜ！」
ゼレナは上体を低くし、掌に風を集める。
そして、それを一気に魔物の腹に叩きこむ。
「風長の掌底（アネモス・パーム）！！」
魔物は呻き声をあげて吹っ飛ぶ。

そのまま樹を薙ぎ倒す。

「続けて喰らいな！風長（アネモス・ツイン・パーム）の両掌底！！」

両手に風を集め放った。

それを喰らった魔物は、見えなくなるほど吹っ飛んだ。

「いっちょ上がりぃ」

『と言う事で～、お世話になりまーす。アネモスで～す』
「可愛い！何この子～！」
アネモスが間延びした声で自己紹介をすると、サリが思い切り抱きついた。
なんだか苦しそうだ。

「サリちゃんが…取られた」
「取られたって…」
「くそォォ！！絶対に許さんぞ！！」
「動物にキレんなよ」
「あ…」

ロットが言った瞬間、ゼレナが「やってしまったね」と目で訴えかける。
そして、ロットにもう一つ視線――――もとい殺気が向けられていた。

『おいらを…』

アネモスはサリの抱擁から逃れロットの前まで来る。
そして――――――

『動物扱いするなぁ！！！』

思い切り飛び蹴りを見舞った。

「ぐふぅ！！」

「アネモスを動物扱いするとああなるから気を付けろよ」

「は、早く言えよ…」

『おいらは高貴なタヌキだぞ』

「タヌキは良いんだ…」

ロットの目の前でアネモスは胸を張った。

「…やっぱ可愛い」

「タヌキの分際でぇぇ！！！」

「まだ言うか！？」

第6話　ゼレナ・ヴェルデとアネモス（後書き）

（雪）「いやぁ、やっと三人目の契約者が出たね」
（ゼレナ）「何か更新遅かったくね？」
（雪）「すんごい忙しかったんだもん」
（ゼ）「例えば？」
（雪）「宿題とか。修学旅行とか」
（ゼ）「へ～、楽しかった？」
（雪）「楽しかったよ～。イメージは」
（ゼ）「…イメージ？」
（雪）「現実では行ってないけど妄想の中で行ってた」
（ゼ）「行ってないんかい！！」

（雪）「えーと、ゼレナはスロバキア語、ヴェルデはスペイン語でそれぞれ緑という意味です」
（ロ）「アネモスはギリシャ語で風って意味らしいよ」
（サ）「だから何であんたが知ってんの！？」
（雪）「次回もお楽しみに～」

第7話　風の主は静かに怒る

「で、要するにあれだ。俺にも世界を取り戻すための戦いに参加しろってか？」
「まぁ、そういう事になるね」

ゼレナは腕を組んで目を閉じる。
30秒ほどしてゼレナは目を開けて言い放った。

「絶対嫌だ」
「えぇぇ！！？」
「やっぱそう言うよね」
「貴様ァ、サリちゃんのお願いが聞けねぇのか？あぁん！？」
「まぁ、ひとまず落ち着けよ」

その言葉で一旦全員が静かになる。
それを確認した後、ゼレナは話し始める。

「最初に何で俺がこんな薄暗い森の中にいるか解るか？」
「「「さぁ？」」」
「諦めんの早いな…」

3人の反応に呆れて溜め息を出すゼレナ。

「で、何でこんなとこにいたの？」
「せっかちだな。まぁいい。何故こんな所にいたかというとだ…」

全員が唾を飲む。

「ある女を捜しているからだ…！！」
「「「…それが？」」」
「えぇ！！！？？」

ゼレナは仰天して思わず叫ぶ。

「別に人捜してるからって一緒に行けない理由にならないだろ？」
「あたしもそう思う」
「いやだってアレじゃん。あの、アレだよ…えーと、うんアレ」
「もう正直に言ったら？」
「めんどくさいから行きたくねぇよ！！…あ」

ゼレナの言葉に3人はやっぱりかという目をする。

「面倒なのはわかるけど、僕だってこうしてついて行ってるんだよ？」
「嫌だぞ！だってこのメンバーで行くと女子率低いうえに…」
「サリちゃんに手ぇ出したら殺スからな…！！」
「てなるだろ！？」
「…仕方ないな。サリ、頼んだよ」

ロットは一歩後ろに下がり、変わりにサリが一歩前に出て言った。

「どうしても…ダメ？」
（う、上目使いだとォォォ！？！？！？）

サリの上目使いに嬉しさを通り越して困惑するゼレナ。

（この世で最も成功率が高いとされる、最早伝説とも言われていた頼み方をするなんて…！！そんなバカなァ！！）

困惑すら通り越して頭がショートしていた。

「…おい、どうしたんだ？あいつ」

「僕に聞かれても困る」

「またお前がサリちゃんを唆したのか！！」

「またってなんだ！またって！」

後ろでそんなやり取りをしていると、遂にゼレナは倒れてしまった。

「もう、そいつ縛り上げて連れていくぞ」

「僕もそれで異議なーし」

「ロットに同じで」

こうして四人は次の契約者を捜しに行くのだった。

「さぁ、行くわよ」

ボタンを押すと、例によって四人の体はその場から消えた。

果たして今度はどこに飛ばされるのか。

「あー…何処だここ」
「暑い…」
「え？二人とも何言ってるの？」
「「はい？」」
「ここどう見たって…」

「火山でしょ」
「「え？…何ぃぃ！！？」」

そう、彼らが今回飛ばされたのは火山だった。
正確には火山の麓。

「でも、火山だからってこんな暑くはねぇだろ！！」
「それは…」

「噴火してるからでしょ」
「「え？…何ぃぃ！！？」」

え？どこかで見たことがある？気のせいでしょ。
え？気のせいじゃない？じゃあ、たぶんあれだよ。正夢ってやつ。

「だ、大丈夫なの？こんなとこにいて」
「僕は大丈夫だろうけど、皆は…無理だろうね」
「それどういうこった！あぁ！？」
「そのままの意味だけど…わからなかった？」

ムセイはまたもやロットに突っかかる。

「そんな事してる場合じゃないでしょっ！！」
「…とりあえずあの村に行こうか」
「また都合よくあったものね」

という事で一行は村に向かった。
そこに待ち受けていたのは、村人たちの土下座だった。

「いやいやいや、何コレ？」
「勘弁して下せぇ！うちの村にはもう食料が…」

「何の話？」
「…あなたたち、もしかして溶竜の遣いのの者ではない？」
「違うよ。僕達はただの旅人だ」
「そうですか…申し訳ありませんが先程申した通りうちには食料など…」
「別に良いから溶竜ってのについて教えろ」
「いえ、しかし…」

結局村人はムセイの剣幕に負けて全てを話した。

「つまり…」
「溶竜がこの村の食料根こそぎ奪ってるわけか」
「…はい」
「そいつはどこにいるの？」
「火山の火口近くに洞窟があります。恐らくそこに」
「また危ない所にいるのね」
「まっ、行きますか」
「ゼレナ…いつの間に起きてたの？」

ゼレナは何も答えず、さっさと出て行ってしまう。
その背中を不思議そうな顔をして三人が見る。

「許せねぇな…」
「人から大切な物（食料）奪って…」
「自分は楽してるってか…」

「マジで許せねぇ…！！」

第7話　風の主は静かに怒る（後書き）

（ロ）「ちょっと短くないか？」
（雪）「まぁ、新章突入だからって事で」
（ロ）「関係ない」
（雪）「いやまぁ…次回もお楽しみに！！」
（ロ）「あっ！逃げた！！」

第8話　変態と年増とトランプと

「おい、あいつどこまで行っちまったんだよ」
「洞窟まで一人で行っちゃったのかな」
「そうだとしたら早いとこ行った方がいいかもね」

三人は今必死に火山を登っていた。
今にも噴火しそうだがそれは気にしない。
ゼレナも探しているのだが全然見つからない。

「ったく、こんな事してたらあたし達干からびそ…う…？」
「どうしたの？」

サリは無言で指をさす。
その顔はどこかひきつっている。
その指の先にはモグラの様な魔物の死骸があった。

「一体誰があんな事を…」

魔物は引き裂かれていたり、潰れていたりとにかく酷い有様だった。

「傷の具合からして…結構最近…二日位前だろうね」
「ちょっ、オレああいうの苦手だから早く行こうぜ」

三人はまた歩を進める。
しかし、魔物の死骸はずっと続いていた。

「これって…溶竜がやったのかな」

「だとしたらゼレナって一人じゃ結構ヤバい？」
「「…ヤバい」」
三人は少し早歩きし始めた。

ここは火山のどこかにある洞窟。

「ここか…溶竜がいるのって」

そこにゼレナは来ていた。

「おりょ？だ～れ？何か用かなぁ？」

洞窟の奥から青い髪の少女が現れる。
歳はロットと同じくらいだろう。

「お嬢ちゃん、ここに溶竜ってのがいるのか？」
「溶竜様に会いたいの？それは無理だな～。あたしを倒さないとここから先は行けれませーん」
「その溶竜ってのは奥にいるのか？」
「あれぇ？聞いてなかったの～？あたしを倒さないと――――――」
「もう一度聞く。溶竜ってのは奥にいるのか？」

ゼレナから殺気が放たれる。
それに萎縮する少女。

「言っとくが…嬢ちゃんでも次はねぇぞ…！！」
「ひっ！」
「すまないが…うちのリーミアを虐めないでもらえるか？」
「あっ！ルロウザ！！怖かったよ～」

リーミアと呼ばれた少女はルロウザと呼ばれた男に抱きつく。
「変態のゼレナにとってはあんなの見せられて黙ってられないんじゃないの？」
「あ～、確かに」
「そうかもしれねぇな」

ゼレナの後ろから聞き覚えのある声がする。
その声の主はロット、サリ、ムセイだった。

「やぁ、ゼレナ。一人でいなくなるから捜したよ」
「…良くここがわかったな」
「それは君もでしょ？」
「俺は風を操って探り当てたんだよ」

ロット達はそれを聞いて納得する。
その様子を見ていたリーミアはルロウザから離れる。

「あなた達は一体何しに来たのかな？」

先に口を開いたのはルロウザの方だった。

「何しに来たって…アレだよ。ね、サリ」
「えっ！？あたし！？」
「溶竜をぶっ飛ばしに来たんだろ」
「そうそう、わかった？サリ」
「だかに何であたし！？」

ロットに急に振られてサリは焦る。

「フフフ、溶竜様をぶっ飛ばす、か。面白い事を言う奴も…て、あれ！？」

四人はルロウザの話を聞かずにさっさと奥に行こうとしていた。

「ちょっ、待て！まだ話は…」
「ほら、ムセイさん、行ってあげないと」
「何でオレが…！！」
「待つのだ。ムセイよ」
「てめぇに呼ばれる筋合いはねぇんだよ！！！！」

ムセイは仕方なく立ち止まる。

「そこの少女も止まりなさい」
「またあたし！？」
「まぁ、行ってきなよ。僕達は奥に行ってるから」
「なんか腹立つ…！！」

サリも仕方なく止まった。

「ルロウザの変態～！あたしよりこんな年増を～！」
「誰が年増だって！？」
「そうだ！サリちゃんはまだぴっちぴちの１５歳だぞ！！！！」
「あたしなんて１３歳だもんねーだ！」
「…そんな子がこんな所にいたら駄目でしょーが。お家に帰りなさい」
「家なんて…無いもん」

ムセイは目を見開く。
言ってはいけない事を言ってしまった気がするからだ。

「あーあ、もう怒った！お前らなんて…こうだ！！」
そう言うとリーミアは銃を構える。
そして、サリに向かって撃ちまくる。
「て、またあたし！？」
サリはやっと気付いた。
今日の運勢は最悪だという事に。
二人はロット達とは別の道を行ってしまった。
「…さて、サリちゃんは行っちゃったし、オレはオレでやるか」
「何をするのだ？私は戦いは好まんのだが、どうしてもというなら…」
ルロウザは懐から刀を取りだす。
だが、ムセイはというと…
「何をするかって？そんなの…これに決まってんだろ！！」
そう言って取り出したのはトランプだった。
「それで一体何を…！」
「トランプっつったら…ババ抜きだろ」
その言葉でルロウザは少々落胆した。
という事で、彼らはババ抜きをする事になった。
…どういう事で？

5分後――――――

「くそっ！バカな…！！」

負けたのはムセイだった。

「何て野郎だ…全くジョーカーを動かせなかった」

「私にトランプで挑むというのはゴリラに握力で挑むようなもの」

「どんな例えだよっ！！」

ムセイはジョーカーを叩きつける。

「とまぁ、遊びはここまでにして真面目にやるか」

と言ってムセイはもう一度トランプを構える。

「いや、真面目にって何を！？」

「え？バ戦ばき抜きだろ？」

「またババ抜きをするのか？」

「勝てるまでやるに決まってんだろうが！」

「諦め悪っ！！」

という事でまたもや5分後――――――

「バカな…一度もジョーカーが動かせなかった…！！」

「これはデジャヴか…！？」

ムセイはガクリと項垂れる。
二度も完全に敗北した。
そのことでムセイの心は深く抉られていた。

「心弱っ！！」
「何故だ…」
「あなたは解りやす過ぎる。ジョーカー取りそうになったらすごい嬉しそうにするし」

ムセイはあーあと言いながら立ち上がる。

「最近オレついてねーよ。娘に会ったと思ったら変な男連れてるし、ババ抜きじゃ勝てねーし…」

ムセイはもう一度トランプを構える。

「ホント、ついてねーよ。クソッたれ！！」
「…いや、またするのか？」
「ちげーよ。今度は…」

ムセイはトランプを切る。

「マジックを見せてやる」

第8話　変態と年増とトランプと（後書き）

（雪龍）
「さて、ここで主要メンバーの個人情報を密かに教えましょう」

ロット・アズル
Ｒｏｔ．Ａｚｕｌ
【１５歳／男／１６３？／５３？／炎長と水長の契約者】

サリ・ジール
Ｓａｒｉ．Ｇｅｅｌ
【１５歳／女／１５７？／４３？／雷長の契約者】

ゼレナ・ヴェルデ
Ｚｅｌｅｎａ．Ｖｅｒｄｅ
【１９歳／男／１７８？／６８？／風長の契約者】

ムセイ・ジール
Ｍｕｓａｅｇ．Ｇｅｅｌ
【３８歳／男／１８０？／７１？】

（ロット）
「個人情報保護法って知ってる？」
（雪龍）
「君達にはそれは意味ありませ～ん」
（サリ）
「人の体重を…」
（雪龍）

「え？サリ？」
（サリ）
「勝手に乗せるなぁ！！！」
（雪龍）
「がはぅぁ！！！！」
（ゼレナ）
「よーし、誰かこいつを連れてけ」
（雪龍）
「密かにの…筈だったのに…ガクッ」
（ロット）
「あ、死んだ」
（ムセイ）
「自業自得だ。ほっとけ」
（ゼレナ）
「作者がこんなになっちまったんで続けるのは無理だな」
（サリ）
「では、次回もお楽しみに」

第9話　トランプマジシャン

ムセイはトランプを放り投げる。
だが、トランプは重力に逆らい空中で静止した。
「マジックとは…面白そうだな」
「そうでもねぇよ」
ムセイが手を広げると、１３枚のトランプが絵を下にしてムセイの周りに集まる。
「最初は何かな…っと」
ムセイが適当に1枚引く。
「おっ、スペードのキングか。結構良いじゃねぇか」
「？　一体それで…」
「ほんでお次は」
今度は残りの４０枚のうちから1枚引く。
「ハートの5か」
すると、ムセイはスペードのキングを呑み込む。
「何を…！！」
「キングの能力『絶対王者（キングダム）』」
ムセイの腕から大砲が出る。

「更にっと」
今度はハートの5を呑み込む。
すると大砲が大きくなる。
「発射ぁ！！」
ムセイが弾を放つ。
だが、その弾はルロウザに当たる前に爆発した。
正確には何かに当たって爆発した。
「おい、何だよそりゃ」
「これはただの鞭だよ」
ルロウザが手に持っていたのは至って普通の鞭だった。
「鞭…ねぇ。連続発射！！！」
ムセイは一気に四発打ち出す。
しかし、全て鞭に当たって爆発させられる。
「これじゃ駄目だな。次行ってみよう」
ムセイはスペードのキングが減った１２枚の中から１枚引く。
「クローバーのジャックね」
今度は３９枚の中から１枚引く。

「ハートの3か」
「今度は何だ…？」
「ジャックの能力『永久不滅（アンデッド・ジャックナイフ）の召使い』」
ムセイがクローバーのジャックとハートの3を呑み込む。
すると、手には大量のナイフがあった。
「これぞジャックナイフ」
その大量のナイフを一気に投げつける。
だが、それも全て叩き落とされる。
「…思ったんだけどさぁ。そっち全然攻撃してこないのにこっちばっかり攻撃してたら虐めてるみたいじゃねぇか」
「ふむ、確かにそうかもしれんな。ならば…！！」
ルロウザは鞭を地面に叩きつける。
すると、小さい石が飛んで、ムセイに当たる。
「いってぇ…そんなのありかよ」
「まだだ！」
「前言撤回。いてぇのは嫌だからもう反撃させない」
ムセイが手を前に出し上にあげる。
「永久不滅（アンデッド・ジャックナイフ）の召使い」
落ちていたナイフが上に飛び上がる。
それに反応できず、ルロウザの体にいくつもの切り傷ができた。

「くっ…！」
「動かねぇ方が良いぜ？」
ルロウザの周りにはナイフが刃を向けて静止していた。
「さあ、お前に選択肢をやるよ。その壱、鞭を置いて負けを認める。その弐、負けを認めず反撃しようとして死ぬ。その参…」
ムセイは人にはあまり見せない笑顔を見せた。
「問答無用で死ぬ。さあ、どれにする？」
「私は負けられない…リーミアの為にも！」
鞭を握る腕により強く力を込めて振り回す。
ナイフは一度地面に落ちるが、もう一度浮遊する。
「残念だな。弐を選んだか」
ムセイは指を鳴らす。
すると、ナイフはルロウザに向かって飛んで行った。
ルロウザは迫りくる刃に恐怖を覚え、目を閉じてしまう。
（ここまで…か。すまない、リーミア）
「…聖なる守護姫（シールド・オブ・クイーン）」
ルロウザは恐る恐る目を開くと、周りに透明な壁ができ、ナイフを弾く。
「…どういうつもりだ」
「はて、何の事だ？」

「ふざけるな！！何故私を助けたんだ！！」
「はぁ？自惚れんな。オレはお前を助けたんじゃねぇ…」
ムセイは洞窟の奥に向かいながら言った。
「オレ自身を助けたんだ。この手を汚さねぇようにってな」
「なっ…！」
「あの子の為だろうが何だろうが、自分から死を選ぶな」
ムセイは一瞬悲しそうな顔をしたが、それをルロウザが気付く筈もなかった。
「特に…大切な奴の為なら…な」

「も～いや～！！」

サリはまだ逃げていた。
後ろからバンバン撃たれているからだ。

「いい加減にしなさい！雷長の力解放！」
『ん？久しいのぅ』
「雷長（グロム・ピストル）の小球弾」

小さい雷の弾を放つ。
それがリーミアの打ち出している弾と当たり相殺される。

「やっと逃げるのやめてくれたんだ～」
「そろそろ鬱陶しくなってね」
「ふ～ん、ま、興味ないや。今から死ぬ奴の事なんて」
「死ぬ、ねぇ。そんな事軽く言っちゃ駄目なのよ？」
「ふ～んだ、知らないもんね～だ」

サリはそれを聞くとニコッと笑った。

「聞き分けのない子にはお仕置きしなくちゃね♪」
「調子に乗らないでよー！」

リーミアは銃を構えなおす。
だが、いくら引き金を引いても弾は出なかった。

「あれ？弾が無くなっちゃった…」
「それは…良かったねぇ…！！」

サリは笑顔のままリーミアに近付く。

「ちょっ、待ってよぉ、あたしの負けだってぇ…」

「いやぁ、個人的にイラッと来てるから…ごめんね？」
「え、ちょっ、嫌ぁああ！！！！」
『…何じゃこの状況』

サリがリーミアの目の前まで近付いたその時、リーミアは懐からスタンガンをだしてサリに押し付けた。

「くらっちゃえ☆」

そう言った瞬間サリに電流が走る。

「くっ…」

サリは思わず膝をつく。

「こう言うのって形勢逆転っていうんだよぉ？」
「…何であなた達はあんな事したの？」
「あんな事？あんな事って何さ？」
「とぼけないで！村の食料を奪ったでしょ！」
「奪った…？わかってない、わかってないよ、あんた達は」
「どういう事…？」

リーミアの手が震えている。
そして唇を噛みしめている。

「あたし達から…」

リーミアの目から涙がこぼれる。

「あいつらは…」

とうとうリーミアは崩れ落ちた。

「全部…！全部奪ったんだ…！！」

第9話　トランプマジシャン（後書き）

（ロット）
「ヤバいよ。この話って全然人気ないよ」
（サリ）
「それはあたし達のせいじゃない」
（ムセイ）
「そうだ。全部あいつのせいだ」
（雪龍）
「だってよ。ゼレナ」
（ゼレナ）
「てめぇに言ってんだよ！！」
（ムセイ）
「本格的にヤベェんだからどうにかしろよ」
（雪龍）
「そうは言われてもねぇ。どうすれば良いのさ」
（全員）
『自分で考えろっ！！！』

第１０話　大切なもの

「全部…！全部奪ったんだ…！！」
「ど、どういう事！？」

リーミアは懐からナイフを取り出し、サリに近付く。

「あんたが知っても意味は無いんだ…！！」

リーミアはナイフをサリの頭に向けて振り下ろした。

これは七年前の事。
村には教会があり、そこに一人のシスターがいた。
ある日、教会の前に少女が横たわっていた。
シスターは慌てて近寄り、呼吸しているか確認する。
ちゃんと息はしていた。

「大変！！すぐに部屋に運ばなきゃ！！」

シスターは急いで少女を教会の中に運び込んだ。

――――――ママ？

――――――ママなの？

――――――行かないで…！

――――――お願い！行かないで！！

「ママッ！！」

「えっ！？ママはまだ早いと思うけど…」

少女が急に起き上がるものだから、シスターはかなり驚いていた。

「…あなた、誰？」

「私はここで神に仕えてるただのシスターよ」

シスターは自己紹介をしてニッコリと微笑む。

「それで、あなたのお名前は？」

「…リーミア」

リーミアは少し警戒しているのか、小さい声で言った。

「何であんな所に倒れてたの？…別に言いたくなかったら良いんだけど」
「ママ…！ママはどこ…！？」
「さあ…あなたの近くにはいなかったわよ？」
それを聞いてリーミアは俯く。
「もしかしてお母さんとはぐれたの？」
リーミアは首を横に振る。
「ママには…もう会えないの…たぶん」
リーミアは布団で顔を隠す。
「ママ…！ママ…！！」
リーミアの声が震えている。
シスターは優しくリーミアの背中を撫でる。
「辛かったね…」
「う、うぅ…ヒック…うん…」
「よし！決めた！」
「？」
リーミアは恐る恐るシスターの顔を見る。
「君を家（うち）の子にする！！」
「えっ…？」
「私が君のお母さんになってあげる！そしたら悲しくないでしょ？」

少し無茶苦茶な事を言っている気もするが、おかげでリーミアの顔が晴れる。

「まぁ、君の意見も必要だけどね。どうする？それで良い？」

「…うん！ありがとう」

「よろしくね。リーミア」

六年後――――――

リーミアはいつものように外に出て庭の掃除をする。

その日もいつも通りにシスターの手伝いをする予定だった。

奴らさえ来なければ…。

「シスター！どこぉ？」

リーミアは教会の至る所を捜した。

しかし、シスターは見つからない。

「どこだろう…？」

「やめてください！」

「！　シスター！？」

リーミアは急いで声のした方に行く。
そこには数十人の男に囲まれたシスターがいた。

「ここにそんな子はいません！」
「嘘ついちゃいけねぇよ？ここにいるってことはわかってんだよ！
ほら出せよ！！」

一人の男が言う。
だが、シスターは怯まない。

「どこに隠してんだ？さっさと言いな！そしたら命だけは取らねぇ
でやるよ！！」
「だからそんな子は――――――」
「シスター…？どうしたの？」
「リーミア！出てきちゃ駄目！！」

リーミアという言葉を聞いた途端、男達の目が一斉にリーミアに向
けられる。

「リーミア、こんなとこにいたのか。捜したぜぇ」
「リーミア！逃げてっ！！」
「シス、ター…？」
「早く！！」

その瞬間、シスターは男に木の棒のようなもので殴る。
シスターは倒れた。

「シスター！！」
「早く逃げなさい！！」

リーミアはこの時初めてシスターの目から涙がこぼれている事に気付いた。

「お願い…」

「うっせぇ！このクソ女（あま）！！」

男はシスターを蹴り飛ばす。

シスターは壁に激突し、血を吐く。

「リーミア…逃げて…」

「まだ喋んのか！！」

男はシスターの首を掴む。

そして、逆の手で小刀を構える。

「やめて…」

「お願い…」

「やめてぇぇぇぇ！！！！！！！！」

リーミアの叫びも虚しく、小刀はシスターの胸を貫いた。

シスターの胸から大量の血が滴る。

「そんな…あぁあぁぁあぁ！！！！！！」

リーミアは絶叫する。

二度も大切な人を奪われた。

その事でリーミアの精神は崩壊しかけていた。

その時だった、彼が来たのは。

「ぐぁぁ！！」

一人の男が叫ぶ。

リーミアが目を開けると、男は肩から血を流していた。

そして、男達の真ん中に先程までいなかった二人の男が立っていた。

「てめぇら、女の子を泣かすなんてよ。しかもまだ子供だぜ？」

二人の男の内の片方が男達を睨む。

「死ぬ覚悟は出来てんのか？あぁ！！？」

一瞬だった。

片方の男が手を振り上げた瞬間、男達の半数ほどが地面から突き出た岩に腹を貫かれていた。

「…半分で許してやる。死にたくねぇ奴はそいつら連れてさっさと帰んな！！」

男達はすぐにその場から走り去った。

「嬢ちゃん、大丈夫だったか？」

「シスターが…シスターが…」

「・・・・・・・」

「リー…ミア…」

「シスター！！」

リーミアはシスターに駆け寄る。

「リーミア…良かった…」
「シスター！」
「ごめんね…あなたを、残して…」

最後まで言えずにシスターは息を引き取った。
リーミアの中に哀しみはあるのだが、涙は出なかった。
リーミア本人は泣き過ぎてもう枯れてしまったのかと思った。

「涙が…出ない…？」
「何言ってんだ嬢ちゃん、涙なら出てるじゃねぇか」

リーミアは目を擦って確認する。
確かに指に水滴が付いていた。
感覚がなかった。
大切なものを失って彼女の殆どが狂っていた。
このまま行けば彼女は死んでしまうと思い、男は彼女を引き取った。

「あなたの…名前は？」
「私か？そうさなぁ、私は…」

男は振り返り微笑む。

「溶竜…で良いや」

（溶竜様のお陰であたしはここまで戻れたんだ！！溶竜様の力にならなきゃ！！）

ナイフが何かに当たる。
サリに刺さったのだと思った。
しかし

「駄目…！！」

サリは躱していた。
正確に言うと肩に掠っていた。

「何で動けるの！？」
「あたしは雷長の契約者。スタンガンなんかじゃあたしを止めることはできない」

サリはリーミアに近付き、抱いた。

「あなたが辛い過去を持っていてどんなに人が憎くても…」

サリの目から一粒の雫がこぼれおちた。

「人を殺しちゃ駄目！そんなことをしても何も変わらない！あなた

の手が汚れるだけ！！」

サリは抱く力を少し強める。

「そんな事をしても誰も喜ばない！！！誰も望んでないのよ！！！！」

「……！」

リーミアはその場に座り込む。

「あなたがどんなに辛くても、憎くても、壊したくてもそれは他でもない自分を傷つけてるだけなの」

「・・・・・・・・・」

「でも安心して。あたしが癒してあげる。たとえどんなに辛くてもあたしが近くにいてあげるから」

「・・・・・・・・・」

サリはしゃがみ込んでリーミアの肩に手を置く。

「もう何も失わなくて良いように…ね？」

その瞬間リーミアの目から大量に涙がこぼれる。

その涙は哀しみであり、苦しみであり、痛みの塊であって、優しさを受け入れるための物なのだろう。

「あ…ありがとう…！！」

「どういたしまして…」

リーミアの心の闇が完全に晴れた瞬間だった。

第１０話　大切なもの（後書き）

（雪龍）
「皆様お久しぶりです！」
（ロット）
「この小説ではね」
（雪龍）
「・・・・・・」
（ロット）
「それにしても最近僕の出番が無いんだけど」
（雪龍）
「次回こそはあるから！」
（ロット）
「良いよ。どうせこの小説あんま人気ないみたいだし」
（雪龍）
「大丈夫！これからだって！！」
（ロット）
「そうなることを僕も願ってるよ」
（雪龍）
「まぁ、次回もお楽しみに」

第１１話　人間を超えた者

「溶竜ってのはどこにいるの？」
「そんな事俺様に聞かれてもなぁ…」

ロットは暑そうに手をパタパタさせている。
ゼレナはそんな素振りは見せていない。

「さっきみたいに風で探り当ててよ」
「今俺の周りに風吹かせてるから無理」
「…何でそんな事してるの？」
「暑いから」

ロットはゼレナを思い切り殴る。
ゼレナは情けない声を出して５ｍほど飛んで行った。

「冗談だって！ちゃんと捜してるって！」
「こんな暑いと冗談通じないんだよ」
「以後気を付けます…それにしても見つからねぇな」
「！！　危ないゼレナ！！」

ロットはゼレナを突き飛ばす。
すると、ロットの足元から数本の岩の槍が出てきて、ロットの足や腕を掠める。
幸い、ロットが早く気付いて動いていたからまだしも、何もしていなかったら串刺しになっていただろう。

「大丈夫か！？ロット！！」
「一応ね。まさか向こうから来てくれるなんてね」

ロットゼレナがある方向を見る。
すると、その方向から茶髪のオールバックの男性が来た。
歳は４０前後だろう。

「あなたが…溶竜？」
「そうだが…君達はアレか。新聞配達とかの」
「「全然違うわ！！」」

溶竜は欠伸をしてその場に座る。

「子供がこんな所に来るもんじゃない。早く帰りなさい」
「カッチーン、今ので俺様怒ったぜ。おっさん」
「おっさん…私はそんな歳に見えるか」
「少なくとも僕達よりは上だね」

溶竜は両手をついて地面の方を向いてブツブツ言っていた。

「なんかイメージ違うな」
「そうだね」
『あいつ…』
「「うおっ！！」」

アクアが突然出て来た事によってロットとゼレナはかなり驚いた。
というより焦ったの方が近い。

「どうしたの？」
『あの男…契約者だ』
「へぇ、珍しいね。炎、水、風、雷、光、岩とは違う長の契約、者…岩…まさか」

ロットは先程地面から突き出した岩を見る。
恐らくこれは溶竜が出した物。
ということは…。

『そうだ、あの男は…』

アクアは目を細めて言った。

『岩長の…ロックの契約者だ！！』

火山を男達は登っていた。
数はおよそ５０人。
皆それぞれ手には剣や斧などの武器を持っている。

「へへへ、ようやくあの男を殺せるぜ」

「いや、先にあのガキを殺してからだ」
男達はそのまま洞窟に入って行った。
「何だ？貴様らは」
男達の前に立ちふさがったのはルロウザだ。
手には刀が握られている。
「こいつもしかしてあの男と一緒にいた奴じゃねぇか？」
「まさか貴様らは…！！」
顔は覚えていないがルロウザにはこの男達が何者なのか分かった。
「そうか、なら貴様らをこれ以上進ませるわけにはいかんな」
「あぁ？一人でどうにかなると思ってんじゃねぇぞ！！」

「こいつが岩長の契約者だと！？」
「ん？」
溶竜がロット達の方を向いて笑顔になる。
「まさか同業者か！？」
「同業者って…」
「そうかそうか！そうならそうと早く言ってくれよ！！」
溶竜はロットとゼレナの肩をバンバンと叩く。
力が強く結構痛い。
「ちょっ、おっさん、痛い」
「ん？おお、スマンスマン」
溶竜は高らかに笑っている。
何が嬉しいのだろう、と思っているロットとゼレナ。
「君達、名前は？」
「そういうのは自分から名乗るもんなんでねぇの？」
「何古臭い事言ってんの？僕はロット・アズル」
「ロットか。私はバルナ・コックラットだ。よろしく！」
「こちらこそ」
ロットと溶竜――――バルナはゼレナを完全に無視し、握手をする。
「おーい、お前らー」
『何だお前は。貫くぞ』
「おわっ！！」

バルナから出てきたのは、鋭い岩で出来た角を持った茶色い馬のような生物、つまり岩の角のユニコーンだった。

「どうしたんだ？ロック」
『久し振りだな』
『アクア？そうか、契約者を見つけたか』
『ブラド、グロム、アネモスも一緒だ』
『なら後はヴァロだけか』
「で、何かあったのか？お前中々出てこないくせに」

ロックはそうだった、と思いだす。

『洞窟に人間が入ってきた。数はおよそ５０。ルロウザが相手をしている』
「なっ！？」

ロックの言葉に驚愕するバルナ。

「何故それを早く言わなかったんだ！！」

バルナは急いで洞窟の入口に向けて走り出す。
ロットとゼレナもそこで待っているのもなんなので着いて行った。

「ルロウザァ！！！！」

バルナは大声で叫ぶ。
不安だ。
バルナにとってルロウザはただの仲間では無かった。
家族も同然だ。
だから見たくなかった。

「ウソ…だろ…」

家族の悲惨な姿を。
体中血で濡れていて、痣だらけ。
特に左腕は曲がってはいけない方に曲がっている。

「ん？あいつじゃねぇか？」

一人の男がバルナの姿に気付く。
ロットとゼレナはその時バルナに追いついて目の前に広がる光景を見た。

「こいつ殴るのも飽きてたから丁度良かったぜ」
「…ぇら…」

「あぁ？」

バルナの肩が震えている。
そして体中から茶色と黒の間位の色の気が出てくる。

『まさか…こいつらここまで！』
「てめぇら…」
「んだよ！ジジ…」

喋っていた男がガクガクと震えだす。
他の男も同じようにバルナの顔を見て震えだす。

「楽に死ねると思ってんじゃねぇぞぉ…！！！！」

今のバルナを見たら１００人中１００人がこう言うだろう。

「岩を統べし長、ロックよ。我、汝との盟約に誓い全てを一つに」

人間などを超えた者。

「人長共鳴！！！」

神だと。

第１１話　人間を超えた者（後書き）

（ロット）
「次回もお楽しみに」
（雪龍）
「早っ！」
（ロット）
「どうせ言う事ないでしょ？」
（雪龍）
「うっ……うん」

第12話　戻ってきちゃったね

「人長共鳴！！」

バルナの体が光に包まれる。
そして光が晴れた時、バルナの姿は先程とかなり変わっていた。
服は黒くて襟が毛皮で覆われている。
頭には岩の角が二本生えており、髪や牙も長くなっている。
手の甲にも角の様な岩が一本。

「さっきも言ったが…」

バルナは一瞬で一人の男の背後に移動し、背中を切り裂く。

「楽に死ねると思うなよ…！！」

そう言った瞬間、男達はバルナに襲いかかった。
その時、ロットとゼレナは陰で見守っていた。

「何だよアイツ。あんなの聞いてねぇぞ」
「戦ってたらやられてただろうね」

二人とも至って冷静に見えるが内心かなりビビっている。
一歩間違えればあの男達の様になっていたのだから。
ドサッ
最後の男が倒れた。

「あれ？もう終わったの？」

男達は苦しそうに蹲っている。
全員死んではいない。

「さて、ここからだ。どうやって死にてぇ？」

バルナの問いにロットとゼレナを含めた全員が震えあがる。
小動物ならそれだけで死んでしまいそうな殺気を放ったのだ。

「おい、あれ止めねぇとヤベェんじゃね…？」
「そうは言ってもあんなの止められる気がしないんだけど」

その時だった。
洞窟の奥からサリ、ムセイとリーミアが走ってきた。

「リーミアッ…！」

バルナは心底安心したように溜め息をついて、共鳴を解く。
だが、リーミアはその場を見て目を見開く。
血だらけの男達の中心に立っているバルナ。
そして何より驚いたのがルロウザの姿だった。

「溶竜様…一体何を…ルロウザも何があったんですか…？」
「・・・・・・・」

バルナが辛そうな顔をする。
そのバルナの後ろで、一人の男がゆっくりと立ち上がり斧を振りかぶっていた。

「溶竜様っ！後ろ！！」
「もう遅ぇよ！！」

だが斧はバルナの体を斬らなかった。
「何してんだよ」
ゼレナが男を吹き飛ばししていたのだ。
「…青年」
「ゼレナ・ヴェルデだ」
ゼレナは風を操作し、男達を全員外に吹き飛ばした。
「何の真似だ…？」
「嬢ちゃんのあんな顔。見たかねぇんだよ」
バルナが振り向くとリーミアはルロウザの前でしゃがみ込み泣いていた。
「…あの傷、早いとこ何とかしねぇとヤベェぞ」
「だが、こんな所に医療施設など！」
「皆近くに来て！！」
サリが大声で近くに寄るように言う。
右手には『ぶっ飛びワープＤＸ２２号』。
要するにワープ装置が握られていた。
「一か八か賭ける！皆早く！！」
サリはルロウザの近くに寄り、全員サリに近寄る。
バルナも何が何だか分からないがサリに近寄る。

「行っけぇ！！」

サリがボタンを押した瞬間、全員その場から消えていた。

「ここはどこ？」

サリが周りを見渡す。
周りには誰もいない。
だが道路はちゃんと整備されていて、それなりの建物もある。
この様子なら病院もあるだろう。

「そうだ！とりあえず病院捜そう！！」
「病院はあっちだよ」

そう言ってロットはサリが行こうとした逆を指差す。

「何で分かるの？」
「来た事あるんかい？」
「来た事っていうか…」

ロットは振り向いて言った。

「この前までここに住んでたし」

そこはロットがサリと出逢った街だった。

第１２話　戻ってきちゃったね（後書き）

（雪龍）
「今回は皆さんの中での矛盾点を解決しまーす」
（ゼレナ）
「えーと、『何故一回で契約者の下にワープ出来たのか』」
（雪龍）
「設定忘れてたとか、性能が上がったとかじゃありません。偶然です、偶然」
（リーミア）
「次回からはちょっと休憩だよ～」
（バルナ）
「あと一人の契約者はもう少し後だな」
（雪龍）
「次回も～お楽～しみに～」

第13話　どこからどこまでがデートになるんですか？

「えーと……一つ聞いていい？」

「何で皆してうちにいるの？」

ここはロットの家。
そこにはサリ、ムセイ、ゼレナ、バルナ、リーミアと包帯グルグル巻きのルロウザがいた。

「何でって行く所無いし…」
「もう男は出てけよ。暑苦しい。女の子だけなら俺様許しちゃうか、ぶふぇっ！！」

調子に乗っているゼレナの頭をロットが踏みつける。

「ここ、僕の家だから」

黒い笑みを浮かべて。

部屋に重い沈黙が流れる。

「ところでルロウザは怪我大丈夫なん？」

ゼレナはルロウザを見て尋ねる。
明らかに大丈夫とは言えないナリだが話題を作るために言ったのだ。
しかし、ルロウザは何も答えない。

「あのー……」
「黙れ変態。私に気安く話しかけないでもらえるか？」
「あぁ！？んだとコラ。何調子乗った事言ってんだミイラ」

ゼレナはルロウザを睨みつけるが相手にしてもらえなかった。

「……ルロウザとリーミアとムセイさんはここに住めばいいから僕達は最後の契約者の所に行かない？」

ロットのその言葉に一人の肩がピクッと動いた。
それはムセイの肩だった。

「何でオレが留守番なんだ！ふざけんな！」
「だって契約者じゃないし、ルロウザとリーミアの二人だけじゃ心配だし」
「だ、だからってよぉ……」

ムセイは突然体育座りをする。

「サリちゃんと離れるのは嫌だし……」

「えっと皆に言わないといけない事が……」

サリがそう言って懐からグチャグチャになった何かを取り出した。

それを見て皆、まさかと思った。

「ゴメン！ワープ装置……壊しちゃった」

「はぁ……退屈ぅ…」

リーミアは街中をトボトボ歩きながら呟いた。

「いずれ恋しくなると思うよ。この退屈な毎日が」

その隣をロットが歩いている。
二人は今買い物に行っていた。
買い物と言っても生活用品などを買いに行くのだ。

「女の子ってこういう事が好きなものなんじゃないの？」
「あたしこんな事した事ないもーん」
「じゃあ初めての経験だね」

ロットは笑顔で言う。
リーミアはそれを見て

「アンタもそんな風に笑うんだ～」

少しニヤニヤしながら言った。

「何かおかしかった？」
「別に～。でもあのゼレナ（変態緑男）の時と全然違うんだもーん」
「まぁ、女の子には優しくしないといけないしね」
「女の子……」

リーミアは少し頬を赤くして俯く。
それを陰で見ている者が三人いた。

「あの優男め……リーミアに手を出す気か…！！」
「ロットってああいう子がタイプだったんだ」
「変態緑男……」

上から順にルロウザ、サリ、ゼレナだ。
二人変な勘違いをしているが気にしない。

「ん？リーミア一人になってしまったぞ」
「ロットは何してんのよ」
「変態緑男……」

三人の視線の先にはベンチに一人座っているリーミアがいた。
ロットの姿はない。

「あの男……リーミアを一人にしおって…！！」
「あっ、帰ってきた。何かリーミアちゃんにあげたよ？あれは……」

ロットがリーミアに渡したのは

「「ソ、ソフトクリーム！？」」

白いバニラ味のソフトクリームだった。
ロットはリーミアにソフトクリームを買いに行っていたのだ。

「完全にデートみたい……」
「そう言えばゼレナはどこだ？」
「あれっ？本当だ。一体どこに……あっ」

サリは見た。
黒いオーラを放ちながらロット達に向かっているゼレナを。

「あいつら…俺様を差し置いてテートだと…！？」
「待て待て待て」

ルロウザが右腕でゼレナを止める。
サリは大人だな、と思っていたが

「私も行こう」
「何で！？」
置いて行くな、という事だったようだ。
「リーミアを誑かしおって…」
「大丈夫ですって！ロットは……はっ」
サリは最初に会った時の事を思い出す。
一見優しそうでどちらかと言えば草食系、しかしあの言葉は…
『襲ってほしいなら、一緒に寝てあげるけど？』
あの時は何もされなかった。
だがあんな事を会ったばかりの女性に言えるという事は…。
「ロットは……どうだろ」
「よし！行くぞ！」
「おう…！！」
「ちょっと待って！！」
ロットら向かって行こうとする二人をサリが必死に止めていた。
そこで口論になり、周りにスゴイ見られている。
それはある少年も例外ではなく周りの人と同じように見ていた。
「……ねぇ」
「あぁ！？今取り込み中だ……あ」
ゼレナが振り返った先には

「取り込み中？大丈夫。早く終わるから」
爽やかな笑顔のロットがいた。
その笑顔が逆に怖い。
ロットは残りの二人も見る。

「サリとルロウザは少し離れてて」
「「は、はい！！」」
「えっ、ちょっ、お前ら！！」

サリとルロウザは猛スピードで逃げて行った。

「さて、何してたのかな？」
「え、えーと……」

その時ゼレナは戦慄した。

（俺生きて帰れる気がしない……）

その日の買い物の荷物持ちはゼレナになったそうだ。
どんな状態になったかは皆様の想像に任せます。

第13話　どこからどこまでがデートになるんですか？（後書き）

（ロット）
「思ったんだけど今まで僕達人気ないって言い過ぎたよね」
（ゼレナ）
「そうだな、今まで読んでくれている読者様に失礼だったな」
（ムセイ）
「ネガティブだったな」
（雪龍）
「これからは考えを改めて僕達は人気があると言っていこう」
（バルナ）
「それはそれで……」
（サリ）
「詐欺とかになったりして」
（雪龍）
「……どうすればいいんだよ」

第１４話　モデリングパニック　前編

「今思ったんだけどさぁ」

そう切り出したのはサリ。
今の所全員ロットの家に居候している。

「もう一人の契約者だけ独りぼっちって寂しくない？」
「サリがあの機械壊したから行けないんでしょ？」
「……うん」

また部屋が静かになる。
ムセイはあの機械を修理中で部屋にはいない。
残ったメンバーは何も話しださない。
先程話し始めたサリも一瞬で撃沈してしまった。

「あ、そうだ」

サリは何かを思い出し側に置いてあったカバンからいかつい機械を取り出す。

「……何それ？」
「お父さんから貰ったんだけど……試しに使ってみない？」
「いやだから何それ」
「わかんない」

その場の一同が思わずずっこけそうになる。
サリは何のためらいもなくロットに機械を差し出した。

「えーと……どういう事？」
「押してみて」
そう言って青いボタンを指差す。
ロットは絶対に押すものかと目を背けるがサリが
「ハ、ハ、ハクション！」
ポチッ
押してしまった。
するとサリの体が光り出した。
そして光が止むと
「大丈夫？」
「……多分、大丈夫にゃん」
『にゃん？』
サリの姿が大変な事になっていた。
頭にはネコの耳が生え、腰辺りから尻尾が生えている。
「ネ、ネコ耳……」
「何言ってるにゃん？何の事……」
ロットに鏡で自分の姿を写される。
確かに自分だが、ネコの耳と尻尾が生えていた。
「どーいう事ーーー！！！？？」
「サリが……ネコ化した……」
「ネコ化なんてやり尽くされてるのによくやるね」

ロットの呟きに呆けているサリ以外が頷く。
案外サリ以外は冷静だった。

「おい、なんか飲み物ねぇ？」

静かな空気の中にムセイがズカズカと入ってくる。
そしてサリを見る。

「……」
「あ、ムセイさんが固まった」
「サリちゃんがネコになったぁぁあああ！！！！？？？」

ボンッ、プシュー

「今度はオーバーヒートしちゃった」

「……ん、ここは…」
「あ、起きたよ」
それを聞いてサリは飛びかかる。
「ちょっとコレどういう事にゃん!?何でネコ耳がにゃん!?」
「あんまにゃんにゃん言ってるとまたオーバーヒートしちゃうよ?」
「サリちゃんが……ネコ耳……」
ムセイは天国にでも行ったかのような笑みを見せる。
そしてもの凄い量の鼻血を吹きだした。
「サリは一旦落ち着いて」
「そうだぜ。おい旦那、こりゃどういうこった?」
「あの『スーパー変身機械(モデリングマシン)』を使っただろ」
ゼレナが尋ねるとムセイはティッシュを鼻に詰めながら答える。
全員心の中で、ネーミングセンスが中二レベルだと思っていたのは誰も知らない。
「その機械では色んな姿に変身できんだよ。青だとネコに。赤だと……」
そう言ってロットの腕を掴み押させる。
するとロットが
「女の子になる」
「何してんだぁぁぁあああ!!!!!」
ロット(女)の飛び蹴りが上手い事ムセイの後頭部に炸裂した。

ムセイは普通に起きて再度説明を始める。
「他にも緑は男、黄色は犬になる」
「あの二人相当堪えてんな……」
ロット（女）とサリ（ネコ）は並んで壁に向かって体育座りをしていた。
その周辺だけ黒いオーラが充満している。
「あたし犬になりた～い！」
突然リーミアが手を上げる。
だがそれをとめる者が二人いた。
「それは駄目だ！」
「してはならん！」
バルナとルロウザだ。
二人とも心なしか頬が赤い。
「え～、何で～？」
「そ、それは……」
「とにかくならんぞ！！」
とんだ親バカである。
しかしリーミアは二人の間をすり抜けボタンを押してしまった。
「「な、なぁぁぁぁぁぁ！！！！！」」
しかし犬の耳や尻尾は生えてこない。

少し背が伸びた位だ。
「あれ？おかしいなぁ」
「この子間違えて緑のボタン押したぞ」
つまりリーミアは男の子になってしまったのだ。
いや、男の娘か。
「間違えちゃった♪」
しかし案外静かだった。
ゼレナがバルナとルロウザを見る。
「なんてこった……気絶(おち)てやがる」
二人は先程のムセイと同じく天国に昇ったような表情だった。
これはこれでありだったのだろう。
「てか、これ戻れんの？」
ゼレナが尋ねる。
その質問を聞いてロットとサリの肩がピクッとはねる。
「ああ、同じボタンをもう一度押せば良い筈だ」
「「よっしゃぁぁああ（にゃん）！！！」」
二人は急いでムセイに跳びかかる。
しかしムセイは機械を床に落として踏みつぶした。
「あ、ごめ～ん。落としちゃった～」

ムセイが黒い笑みを浮かべる。
ロットとサリはこの世の絶望を迎えた様な顔をした。

（ぜってぇわざとだ。サリの姿をまだ見ていたいんだ）
（あとこのチビを陥れたかったんだよ！！）
（心を読むな！！）
「「何してんだぁぁぁああああ！！！！！」」

その後、ムセイは二人にボコボコにされ、機械を直す事になった。

次回へ続く

「続くの！？」

第１４話　モデリングパニック　前編（後書き）

（ロット）
「何で続くの…？」
（雪龍）
「面白いから（笑）」
（ロット）
「面白いから？へぇ……！！」
（雪龍）
「え？ロット君？何か黒いオーラが……」
（サリ）
「あたしもいるよ…（黒笑）」
（雪龍）
「（黒笑）って何！？ちょっ、まっ、ぎゃぁぁあああ！！！」

（ゼレナ）
「……次回もお楽しみに」

第１５話　モデリングパニック　後編（前書き）

半月も投稿できず、すいませんでした！
しかし今後もこのような事が続くと思います。
本当にすいません。

第15話　モデリングパニック　後編

――――前回のあらすじ――――
ロット＝女の子
サリ＝ネコ
リーミア＝男の娘
機械がお父さんの手により破損されました。
――――それでは後編――――

「とりあえず絶対に外出ないから！」
「お父さんは早く機械作り直してよね！」

ムセイはボロボロの体を引きずって、別の部屋に機械を作り直しに行った。
あのワープの機械（ぶっ飛びワープＤＸ２２号）も作り直しているのに、仕事が増えてしまった（自業自得）。
一日あれば完成するらしい。

「さて、ロットちゃん、散歩に行こうか」
「うるさい変態」

言わずとも分かるだろうがゼレナの事だ。

「そんな事言わずにさぁ」
「そうだよ！」

それに乗って来たのはなんとリーミア。
ロットに反してリーミアは出掛けたいのだ。

「なら二人で行ってきなよ」
「え～、俺男に興味ナッシィングだから」
「……複雑だね」

ロットはどうしても外に行きたくなかった。
何故かというと知り合いに出逢ってしまいそうだからだ。

「ちょっと変態緑！あたしは正真正銘女の子！！」
「誰が変態緑だ！！てか今は男だろーが！！」
「喧嘩はやめなよ。ややこしいから」

ロットが言うと二人は喧嘩を止める。
何だかロットがこの中で一番偉い気がする。
……女の子だけど。

「このままじゃ暇だしさ。外行こうよ～」
「何回言われても嫌だ」
（こうなったら……）

リーミアはロットの腕を掴む。

「えっと……どういう事？」
「こういう事♪」

リーミアはそのまま思い切り引っ張った。
ロットは引きずられる。

「ちょっ、待って！」
「待たないよ～だ」

ロットは抵抗するが、今のロットは女の子、それに対してリーミアは男の子。
性別が変わったことで腕力も変わっている。

「リーミアは元から力は強いぞ」

前言撤回、元からロットより強いかも知れない。

「そ、それはないもん！」

リーミアの声は虚空にこだました。

「〜〜♪」

リーミアは嬉しそうに鼻歌交じりにスキップしている。
その隣にはサングラスとマスクをして、コートを着、帽子を目深にかぶった、いかにも怪しい人物が歩いている。

「もう、ロット〜、何でそんな重装備なの？」

「……分かってるでしょ？」

怪しい人物―――ロットは周りから見たらかなり挙動不審な為、かなり目立つ。

「やっぱ全部取ってよ～」
「無理」
「もう……最終手段しかないな～」

そう言うと、リーミアは一瞬にしてロットのサングラス、マスク、帽子をはぎ取る。
何という早業。
そしてその早業を何故こんな無駄な所で使ったのだろうか。

「リ、リーミア！それ全部返せ！！」
「やだね～」
「あれ？ロットじゃね？」

誰かに声をかけられる。
その瞬間、ロットの体が誰から見ても分かるほどにビクッと震えた。

「お前旅に出たんじゃなかったっけ？」
「ロ、ロット…？誰カナソレ…？」

ロットが振り返る。
話しかけていたのはプロローグで出てきたあの友達だ。

「いや、お前絶対ロットだろ」
「し、知らないな～……」
「ウソつくなって」
「ホントに知らないな～……」
「ねぇ、ロット、この人誰～？」

「ちょっ、リーミア！？」

友達は「やっぱそうじゃねぇか」と苦笑している。
リーミアは笑顔だが、その裏から黒さを感じる。

（わざとだ……絶対わざとだ…！！）
「へ、へぇ、リーミアって言うんだ君」
（あれ？コイツ顔赤くない？）
「ちょっとお話しないしない？」
（え、何誘ってんの？まさかのナンパ？いやいや、だって今のリーミア男の子だよ！？何コイツ男の子を古臭い口説き文句で誘ってんの！？）

※リーミアは元は女の子です
友達のナンパに対し、リーミアはというと

「あたしロットと溶竜様とルロウザにしか興味無いから無理」
（撃破したっ！？）
「ロット……」

友達の手が震えている。
ロットの額から嫌な汗が出る。

「お前旅に出るとか言いながらこんな可愛い子と何してたんだぁぁぁぁ！！！！」

※リーミアは今は男の子です

「何勘違いしてんだっっ！！！」

ロットの拳が友達の顔面に決まった。

「はぁ……」

ここはロットの家の玄関。
あの後、ロットとリーミアの二人は友達を放っておいて帰って来たのだ。

「もうちょっと遊びたかったなぁ」
「もう十分でしょ……」

ロット達はただいまと言って部屋に入る。
丁度ムセイが機械を使ってサリの体を元に戻している所だった。

「おぉ、丁度良かった。テメェらもさっさと元の姿に戻りやがれ。そしてさっさと行くぞ」
「それって……」
「ああ、『ぶっ飛びワープＤＸ２３号』が出来た」
（確か前のって２２号だったよな……）
「だから元に戻ったらさっさと行くぞ」
「……よし！最後の一人を捜しに行こう！」
「だから元に戻れって」

ムセイの冷静なツッコミによりロットは今の体の状況を思い出した。

「そう言えば今僕女の子じゃん！！」

「今更かよ！！」

今度のムセイのツッコミは冷静ではなかった。

第１５話　モデリングパニック　後編（後書き）

（ロット）
「一つ聞いて良い？何で僕女の子になってたのにあの名前も出ない友達は僕って気付いたの？」
（雪龍）
「それはロットが女ｇ――――」
（ロット）
「それ以上言うと凍らせた後燃やすよ」
（雪龍）
「何その理不尽！！自分で聞いたくせに！！」
（ロット）
「さて、次回からはようやく契約者捜しだね」
（雪龍）
「無視かよ……」
（ロット）
「次回もお楽しみに」
（雪龍）
「そして終わらせるのかよ！！」

第１６話　強大な敵

「さて、行きますか」

ゼレナが言って振り返る。
しかし、そこには誰もいなかった。

「何してるの？早くしてくれない？」
「え……ああ……うん」

皆を待っていたつもりが、もう既に全員準備が終わっていて、ゼレナを待っていた。
ゼレナは少し悲しくなったとか。

ワープ終了。
一行はどこかの神殿の様な場所に着いた。

「こんな所に本当にいんのか？」

ゼレナが言った瞬間後ろからドスンという音と共に地面が揺れた。

「何だ？地震か？」
「そうみたい、だ…ね……」

ロットは後ろを向くと目を見開いて声を震わせる。
何か焦っているようだった。
ロットにしては珍しい。
驚いたりはするが、大抵冷静なロットがここまで焦るような事はそうない。
ゼレナも後ろに振り返ってみる。
……ロットと同じ顔になってしまった。
だって最初に見えたのがものっ……すごい大きな足だったのだから。

「何…これ……」

もちろん始めは何なのか分からなかった。
しかし、少し上を向いただけで何なのか分かった。

「……巨人？」
「うがぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

巨人が手に持っている大きな棍棒を振り下ろす。
何故巨人は棍棒を持ってる（イメージ）なのだろうか。
全員それを躱すが、上手い事半分に分かれてしまう。

「とりあえず隠れろ！！」

バルナの言葉を聞いて全員物陰に隠れる。
巨人は自分で地面を叩いた時に上がった砂埃によって、ロット達の姿が見えなかった為、隠れた事が解らなかった。
寧ろ誰も居なかったので全員仕留めたのだと思い、何処かに行って

しまった。

「……帰ったみたいだね」
「おい、どういう事だよ。何であんなのがいんの？契約者がいるんじゃなかったの！？」
「あっ！忘れてた！！」

サリが機械を見ながら叫ぶ。

「何を忘れてたの？」
「ロット……この機械の設定を思い出して……」
「設定？……あ」

この機械の設定。
最初に説明した時サリはこう言った。
『契約者の元へ行く前に別の場所に飛んで困っている人を助けないといけないの』と。
つまり

「ここに契約者はいないわ」
「なっ、そこは直してよムセイさん！！！」
「あ？そんな機能付けた覚えねぇぞ」
「……駄目だこりゃ」

ロットが溜め息をつくと、またドスンという音が地面から響く。

『……デジャヴ？』
「がぁあああぁあ！！！」

巨大な棍棒が振り下ろされた。

神殿の近くの村。

「何だ？神殿の方が騒がしいな……」
「またあの巨人が暴れてんじゃねぇか？」
「あそこに勝手に住み始めてもう半年か……」

村の者達は声をそろえてこう言った。

『あの巨人をどかしてくれる人はいないかなあ』

どうやら困っている人はこの村人達で、あの巨人を倒す、もしくは退去させる事ができれば解決らしい。
…運が良いというか何と言うか。

「……あれ？」

サリは自分の姿を確認した。
自分達は巨人の棍棒に潰された、筈だった。
しかし、何ともなっていない。
ゆっくり上を見る。

「うぉぉおおお！！！」
「ゼレナ！？」

ゼレナが腕に風を纏い巨人を殴り飛ばしていた。
巨人がふらつく。
その巨人の足元にはバルナが構えている。

「岩長（ロック・クラッシュ）の団塊！！」

固めた岩を思い切り巨人の足にぶつける。
巨人は更にふらつく。
そこに止めのロットが

「炎長（ブラド）と水長（アクア）の融双破（ブラド・アンド・アクア・ブラスト）！！！」

炎長（ブラド）と水長（アクア）の力を融合させた紫色の光を巨人に放ち吹き飛ばす。
巨人の体は壁を突き破り外に飛んで行った。

「み、皆？何してるの？」
「何って……」

三人はそれぞれの力を解放する。

「人捜す為にはこっから出ねぇといけねぇ」
「しかし、奴に見つかって隠れての繰り返しではいつ出れるか分からんのでな」
「どうせなら倒して行く事にしたんだ」

最後に行ったロットがサリに微笑む。
その笑顔は爽やかだがどこか黒かった。

「さて皆、力を合わせてアイツを倒そう！！」
『嫌だ！！』
「ええ～……」
「力を合わせる必要なんてねぇよ」

ムセイがロットに言う。

「それぞれが本気で行けば良いんだ」
「……わかった」

全員巨人を追って外に出る。
巨人は既に立ち上がっており、誰が見ても怒っているのが分かる。
ロットは手に炎を纏わせる。
いつの間にか髪と眼が真紅に染まっている。

「てめぇら！気ぃ抜くんじゃねぇぞ！！」

第１６話　強大な敵（後書き）

（サリ）
「ロットってよく口調が変わるよね」
（ロット）
「作者が適当だからキャラが固まってないんじゃないの？」
（雪龍）
「違うわ！ちゃんとした理由があるわ！！」
（ロット）
「それなら良いんだけど」
（サリ）
「では次回もお楽しみに」
（ロット）
「……短かったね」
（雪龍）
「後書きって普通こんなもんだよ」

第17話　アダム（前書き）

スイマセン！長らくお待たせしてしまいました！

第17話　アダム

「うがぁう…！！」
「おーい、皆。気ぃ抜いてっとやられちまうぜー？」
「って言ってるアンタが一番危なっかしいよ。ゼレナ」
「あり？やっぱり？」

ゼレナも自覚があったらしい。
巨人が起き上がってくる。

「ここは契約者だけで戦わせてもらって良いかい？ムセイの旦那？」
「はぁ……好きにしろ。その代りサリちゃんに傷一つでも付いたらテメェら消し飛ばすかんな」
「おぉ怖っ」

契約者四人を残して後ろに下がっていく。

「行くよ！雷長の力――――――」
「風長の力――――――」
「岩長の力――――――」
「「「解放ッ！！！」」」

サリ、ゼレナ、バルナの三人が力を解放する。
ロットは今は炎長、プラドの力のみ解放している。

「攻撃は俺とゼレナで行く。サリとバルナは援護を頼む。良いか？」
「「「了解」」」

ロットとゼレナは同時に走り出す。

巨人を挟むように両側まで走ると跳躍する。
巨人はロットを吹き飛ばそうとするが、サリが電気の弾を巨人の腕に放つ事で攻撃を遮る。

「炎長(ブラド)の――――――」
「風長(アネモス)の――――――」
「「烈拳(ブレーク)！！！」」

ロットとゼレナのパンチが巨人の頭を挟む。
巨人はグラグラと揺れ後ろに倒れる。

「これで動かないでもらえると嬉しいんだけどねぇ」
「残念ながらそれは無理な相談だそうだ」

巨人は雄叫びをあげながら立ち上がる。

「皆、俺の身体の何処にでも良いから触れろ」
「は？何言ってんの？」
「俺に秘策があるんだよ。良いからやれ」

ロットに言われ、サリ、ゼレナ、バルナの三人はロットの肩に手を置く。
ロットは目を閉じ、右手を前に突き出す。

「僕だけができる必殺技？」

ある日突然、アクアがそう言ってきた。
もちろん何を言ってるんだ？と思った。

『ええ、今お前は二体の長の契約者だ』
「それは解ってるよ」
『だが本来それはあり得ない事なんだ』
「……何で？」

当然の質問だろう。
あり得ないと言われたが実際にあり得ているのだから。

『一つの器に二つの魂を入れるので通常限界の筈なんだ。なのに君の身体には三つの魂が存在している。恐らくその副作用で多重人格になっているんだ』

正直言っている事がよく分からなかった。
ロット自身には多重人格だと言う自覚があまり無いのだ。

『お前の器は常人のそれより遥かに大きい。そんなお前だけ出来る技を教えてやる』
「いや良いよ。面倒だし」

ロットはそう言ったが、この後みっちり教え込まれる事になってしまった。
余談だがアクアの指導はかなりきつかったそうだ。

『お前は神に愛された存在なのだ――――』

「力を借りるぞ」

ロットが言うと、肩を掴んでいる者達の力がロットに移っていく。

「なっ、何これ…！」
「力が抜けていく…！」
「ロット…一体何をする気だ…？」
「雷、風、土の長よ。我との一時契約を命じる」
「「「なっ！？」」」

三人が驚く中、グロム、アネモス、ロックが驚いた様子で具現化する。

『そうか……お主がアダムの子孫じゃったか……』
『なら～、おいら達は命令に従うよ～』
『……好きにするが良い』
「ロット……アダム…？」

ロットの身体に三体の長達が入っていく。

そして、今までに見た事のないような力がロットの右手に集中する。

「集え、元素を統べる者達よ。我との契約の下に、放て！！」

『炎長、ブラド。了解だ』

『水長、アクア。承知した』

『雷長、グロム。畏まりました』

『風長、アネモス。ＯＫだよ～』

『土長、ロック。了解した』

「五元素（ファイブ・エレメント）の大爆砲！！！」

炎、水、雷、風、土、それぞれの力が合わさり、更に大きな力となって放たれる。

それが巨人に当たると大爆発を起こし、辺りを光が包んだ。

光がだんだんと晴れていく。

「はぁ…はぁ……やったかな……」

巨人は跡形も無く消え去っていた。

巨人が居た場所は大きく陥没していた。

「皆……ありが、とう……」

そこまで言うとロットは地面に倒れ伏せた。

長達は元の契約者の下に戻っていく。

「ロット！！」

サリ達が駆け寄る。

後ろに控えていた者達も駆け寄ってくる。

「凄い熱。相当無茶な技だったんだ……」
『すまん…。私が教えたんだ』
アクアが申し訳なさそうに謝る。
「少し休ませようや。俺様くったくただよ。二人もそうだろ？」
サリとバルナも立っているのがやっとだった。
「それとさ、一つ聞かせて欲しいんだけどよ」
ゼレナはアクアの方を向いて尋ねた。
「ロットの事、何か知ってんだろ？俺達に教えてくれよ」
アクアは過去を思い出す様に目を閉じた。

第17話　アダム（後書き）

（ロット）
「遅いよ……」
（雪龍）
「スイマセン……」
（サリ）
「まぁ、良いじゃん！それより本編は謎が多いね」
（雪龍）
「うん、何か今書いている小説の中で一番先が見えないのはこれだからね」
（ロット）
「作者自身先が見えないってどういう事？」
（雪龍）
「何か皆の口調とかキャラとか忘れてきちゃったの」
（サリ）
「それただ単に忘れただけだよね！？」
（ロット）
「しっかりしてよ」
（雪龍）
「ごめんなさい…。次回も遅くなるかもしれませんがお楽しみに」
（ロット&サリ）
「「オイ！！」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0636s/

世界を取り戻す５人の契約者

2012年1月9日00時45分発行